

武田城下町遺跡VI

—国立大学法人山梨大学紫雲館建設工事に伴う発掘調査報告書—

2010

国立大学法人山梨大学
甲府市教育委員会

序

本書は、甲府市大手一丁目地内におきまして、国立大学法人山梨大学紫遙館建設に先立ち実施いたしました武田城下町遺跡の発掘調査報告書であります。

躊躇ヶ崎の地に武田信虎が領国統治の本拠として武田氏館を構えた後、甲斐の中心地として形成された中世城下町「甲斐府中」から県都としての本市の歴史は始まっています。そのため、甲斐府中と推定される地域を城下町の遺跡として登録しております武田城下町遺跡は、本市の成立と発展過程を知る上で欠くことのできない遺跡であります。

このたび、発掘調査の運びとなりました調査地点は、平成20年度に実施いたしました調査地点のすぐ西側の隣接地であります。調査の中では、平成20年度から連続する溝跡などの遺構が複数確認され、城下町の広がりを知る上で貴重な成果となりました。溝の中からは焼けた粘土塊や石が多数出土するとともに、周囲からは鍛冶職人が使用したと考えられます熔けた金属が付着した土器片が発見されるなど、居住者の解明につながる手掛かりを得ることができましたことは大きな成果となりました。

2カ年におよぶ発掘調査によりまして、この地域の新しい歴史が明らかにされたことは、本市にとりましても貴重な財産であり、戦国時代に勇名を馳せた武田氏の基盤を考える上でも重要な資料を提供できたものと考えております。

このたびの一連の発掘調査にあたり、ご協力を賜りました国立大学法人山梨大学をはじめといいたします関係各位に心より感謝を申し上げますとともに、本市文化財保護行政の更なる推進にご理解とご助力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成22年3月

甲府市教育委員会
教育長 奥田 理

例　　言

1. 本書は、山梨県甲府市大手一丁目4310番地内に所在する武田城下町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、国立大学法人山梨大学職員寮紫雲館建設工事に伴うものであり、国立大学法人山梨大学との委託契約に基づき、甲府市教育委員会が実施した。
3. 調査経費は、試掘調査を甲府市教育委員会が国庫補助・県費補助を受けて負担し、本調査を国立大学法人山梨大学が負担した。
4. 試掘調査及び本調査は、佐々木満（文化振興課文化財主事）が担当した。
5. 発掘調査の期間及び面積は以下の通りである。

試掘調査 平成21年 7月14日～平成21年 7月22日 調査面積 約 24m²

本調査 平成21年10月 1日～平成21年11月21日 調査面積 約210m²

6. 本書の執筆は、佐々木満が担当し、末尾に山梨県立考古博物館 保坂康夫氏と山梨県立博物館 岱名貴彦氏から寄稿いただいた。
7. 図化作業のうち、陶磁器・石製品の実測、遺物トレス、写真撮影を株式会社シン技術コンサルに委託し、旧石器の実測、トレスは保坂康夫が行い、土器の実測、遺構トレスなどそれ以外の図化作業は佐々木満が行った。
8. 座標測量及び空中写真測量は、株式会社シン技術コンサルに委託した。
9. 本書の編集は、小林純一（文化振興課長）を責任者として佐々木満が行った。
10. 本書に係る出土遺物及び記録図面、写真などは甲府市教育委員会で保管している。
11. 出土した金属製品の保存処理は、財団法人山梨文化財研究所に委託した。
12. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、次の機関及び諸氏から御指導・御協力を賜った。記して厚く感謝申し上げる。（敬称省略）
国立大学法人山梨大学施設管理課・山梨県教育委員会学術文化財課・財団法人山梨文化財研究所
数野 雅彦・岱名 貴彦・畠 大介・保坂 康夫
13. 発掘調査参加者
雨宮 小春 荒木 昭彦 綱干 祐馬 池谷富士子 金井いく代 影山三亜次 小池 幹子
坂本しのぶ 佐藤美喜男 高橋 主税 古屋袈裟男 渡辺百合子 若狭 宗晴

凡　　例

1. 発掘調査地点の測量においては、世界測地系X座標-35505.00・Y座標 6850.00を基軸として5mグリッドを設定している。
2. 本書に掲載した地図は、平成14年要部修正50万分の1地方図(4)関東甲信越、平成3年度甲府市都市計画図2500分の1・10000分の1、大日本帝国陸地測量部地形図25000分の1を用いた。
3. 遺構断面土層の色調及び遺物観察表中の色調は、『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2008後期)に基づいている。
4. 遺構・遺物の実測図縮尺は、基本的には暗渠1/50、溝跡1/80、掘立柱建物跡1/40、土坑1/40、出土遺物1/3であるが、石製品には例外もあるため、図中に示した各スケールを参照願いたい。
5. セクション図に表記されている水平線の数値は、海拔高度を表し、単位はmである。
また、セクションポイント表記のE・W・S・Nは、東西南北を表し、同じ遺構で複数の断面観察を行っているところは、アルファベットで表記している。
6. 遺物実測図で反転復元したものについては、実測部分と復元部分の間にスペースを設けているが、全体を反転復元したものについては、中央線部でスペースを設けて区別した。
7. 本書作成に際して引用・参考にした文献は、一括して本書第4章末尾に記載した。
8. 本書に使用した記号及びスクリーントーンは、以下のとおりである。

煤

熔融物

須恵器

目 次

挿図・挿表目次

序	
例 言・凡 例	
目 次	
挿図・挿表目次	

第1章 武田城下町遺跡の概要

第1節 遺跡の立地環境と歴史	1
第2節 武田城下町遺跡の範囲	4
第3節 調査地点周辺の状況	4

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	6
第2節 試掘確認調査と基本層位	6
第3節 調査の方法	7
第4節 調査の経過	8
第5節 調査後の処置	8

第3章 遺構と遺物

第1節 暗渠・戻跡	10
第2節 溝跡	12
第3節 土坑	14
第4節 掘立柱建物跡・Pit	20
第5節 遺構外出土遺物ほか	20

第4章 考 察

第1節 武田城下町遺跡大手一丁目	
4310 地点の遺構変遷	26
第2節 武田城下町遺跡大手一丁目	
4310 地点の出土遺物の様相	27
第3節 山梨大学職員寮建設に伴う	
発掘調査成果	27

第5章 結 語

寄 稿 武田城下町遺跡の旧石器時代遺物	32
寄 稿 武田城下町遺跡出土遺物の科学	
分析について	33

写真図版	
付図：調査区遺構平面図	36

図 1 調査区位置図	2
図 2 武田城下町遺跡範囲図	2
図 3 武田期の城下町開連施設等推定図	3
図 4 調査対象地及び周辺調査区位置図	5
図 5 試掘調査トレーンチ配置図	7
図 6 調査区グリッド配置図	9
図 7 1・3号暗渠、戻跡	11
図 8 1・5・6・7・9号溝跡	15
図 9 2・3・4・8号溝跡	16
図 10 1～5号土坑	18
図 11 6～9号土坑	19
図 12 1号掘立柱建物跡、Pit 1～13	21
図 13 1・2号暗渠、1・2号溝跡出土遺物	23
図 14 2・6・9号溝跡、2・5土坑、	
12号Pit、調査区出土遺物	24
図 15 調査区出土遺物、旧石器、金属製品	25
図 16 調査区遺構変遷図	29
図 17 調査区周辺の道と敷地の変遷	30
図 18 戦国期の星敷地割	30
出土遺物観察表	22

写真図版

平成20・21年度発掘調査区全体合成写真	36
調査区全景(俯瞰)	37
調査区全景(直上)	38
調査区近景	39
1～3号暗渠、1～2号溝跡	40
2～5号溝跡	41
6～9号溝跡	42
1号土坑	43
1号掘立柱建物跡、調査区南側黄褐色土带、	
戻跡、調査風景	44
出土遺物写真	45

第1章 武田城下町遺跡の概要

第1節 遺跡の立地環境と歴史

奥秩父山塊から延びる甲府盆地北部の太良ヶ嶺を水源とする相川が形成した扇状地開析部から甲府駅周辺まで広がる扇状地先端部の南向きの緩斜面上に遺跡は展開する（図1）。相川扇状地は三方を山に囲まれ、西を南流する相川と東を南流する藤川の両河川によって遮断された天然の要害であり、外縁の山塊には城砦網が整備され、堅固な構えとなっていた。

武田城下町遺跡の地形を等高線から追ってみると、館跡西側では相川に向かって急斜面が形成され、東も藤川に向かう緩斜面と河川間際で大きな断崖が形成されていることから、遺跡は扇状地上で比較的安定した扇状地扇央部に展開しており、調査地点はその中央付近に位置する。

甲斐守護武田信虎は、永正16年（1519）に甲府市東部に位置する川田館から相川扇状地頂部の鷹巣ヶ崎の尾根の先端部に館を移転させ、同時に家臣団の集住を強制したことが記録されている。この武田氏館造営を契機に成立した中世城下町「甲斐府中」（甲府）が武田城下町遺跡である（図2）。

中世の甲府については、『高白齋記』によると、重臣甘利氏を始め、信濃を追われた諫訪下社の金刺氏も早い段階から武田氏を頼って屋敷を構えたことが記録されている。さらに武田信玄・勝頼による領土拡大に伴い、甲府は武田領国の中心として繁栄したと考えられ、天文17年（1548）に出された地下人による城下への田畠や新屋敷造成の制限からもその一端を窺い知ることができる。武田氏が城下における開発に対して統制を行わざるを得ない状況にあったことは間違いないく、甲府周辺の開発がこの時期に活発化し、城下町が急速に拡大したことを見記述として評価されている。

文字資料以外にも相川扇状地一帯に残された旧字名から様相の一端を推定することができる。甲府には多くの武将たちの屋敷や寺社が構えられるとともに、商人などの町屋が形成されていたと想定されているが、武田氏館跡周辺には「道軒屋敷」（武田道遙軒信綱）、「土屋」（土屋右衛門尉正次）、「天久」（武田典厩信繁あるいは信豊）など重臣に関連する字名が残され、館跡西側にも府中八幡社の故地を示す「古八幡」の字名がみられる。

発掘調査では、そうした城下町各所の調査を実施しているが、近年では館跡東側に位置する「三角」と「高堀」、その南側に位置する「鍛冶小路」周辺の発掘調査では、熔けた金属が付着した土器が多数出土している。出土遺物の様相から鍛冶工人の居住域である可能性が高いとみており、館の隣接地に様々な階層の屋敷群が混在した状況であったと考えられる（図3）。

しかし、武田信玄の没後に家督を継いだ武田勝頼は、天正9年（1581）に真田昌幸らに命じて董崎の七里岩台地上に新府城を築城し、本拠を移転したが、その直後の天正10年（1582）には織田信長・徳川家康の連合軍による侵攻を受け、武田氏は滅亡した。そのため、家臣屋敷を含む城下町移転も計画されていたと想像されるものの、新府城在城が極めて短期間であったことと、新たな領主たちは再び甲府を統治拠点としたことからも、相川扇状地上に成立した甲斐府中はそのまま機能していたと考えられる。

甲斐国経営を任せられた徳川氏・豊臣氏家臣らは、鷹巣ヶ崎の武田氏館跡に改修を加え、領国統治の拠点としたことが近年の武田氏館跡の発掘調査等で明らかになっているが、やがて扇状地南端部の独立丘陵である一条小山に近世城郭である甲府城を築城した。甲府城築城に伴い府中城も移転させられ、城下町でも武田氏館跡近郊は農村化し、甲府城に近い南部一帯は古府中として甲府城三ノ堀内に組み込まれ、近世城下町の一部として再編成された。



図1 調査区位置図

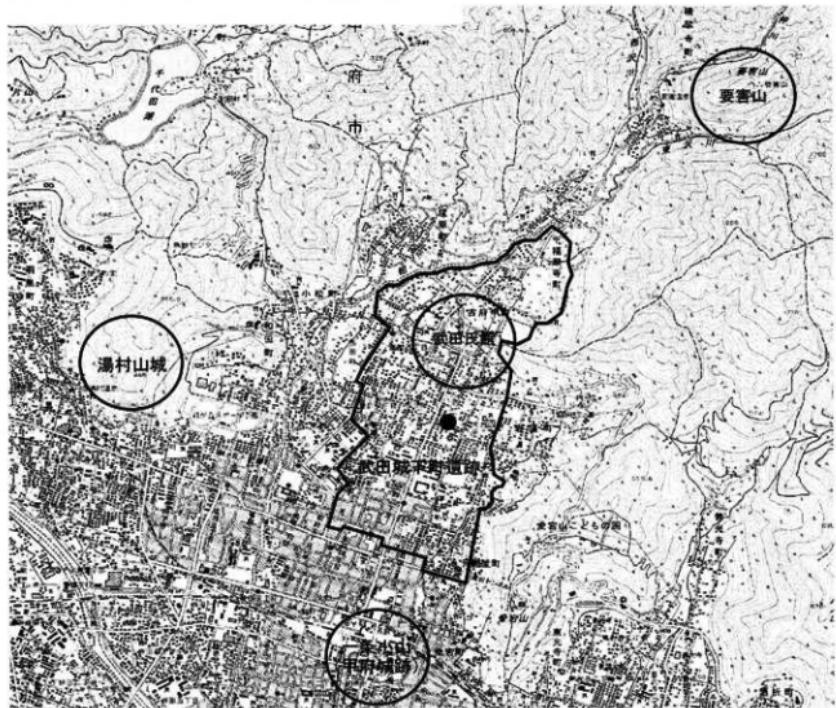
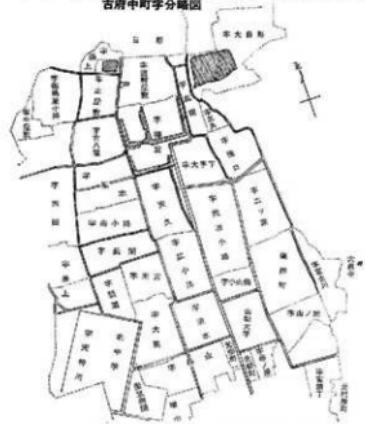
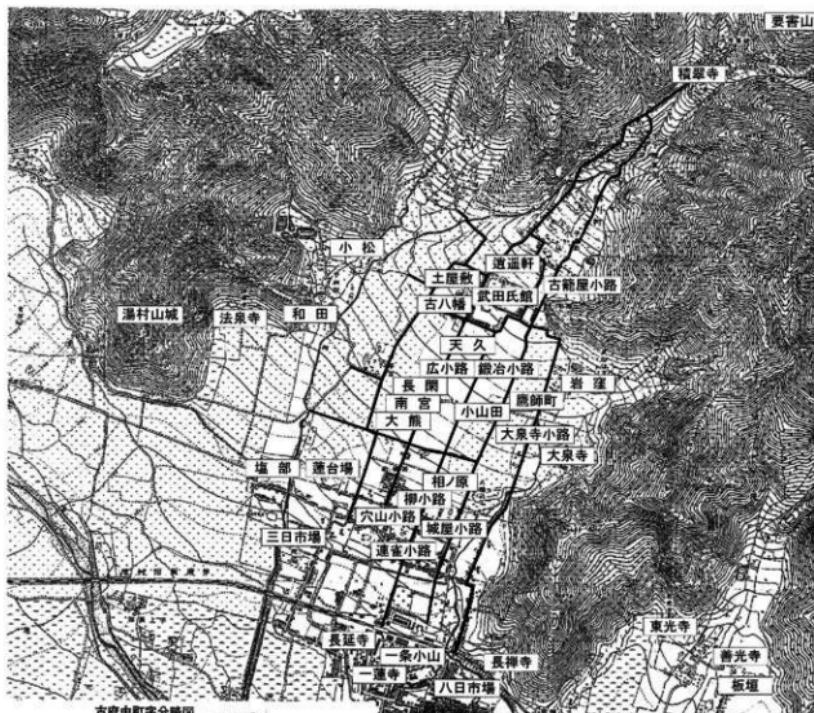


図2 武田城下町遺跡範囲図



(飯沼1985より抜粋)

図3 武田期の城下町関連施設等推定図

第2節 武田城下町遺跡の範囲

前節のとおり、甲府には中世と近世の二つの異なる時代の城下町が重複しながら存在することから、遺跡の取り扱いとしては、城下町遺跡を便宜的に区別する必要があった。そのため、武田氏館を中心とした中世の城下町を武田城下町遺跡、甲府城を中心とした近世の城下町を甲府城下町遺跡と呼称している。

そのうち、武田城下町遺跡の範囲については、江戸時代に描かれた城下町に關わる古絵図、あるいは字名、地割、現地形などから推定される範囲を考慮して図2のように登録している。北は、武田氏館跡周辺から相川上流の下積翠寺町付近を北限とし、東西の幅は、相川と藤川に挟まれた扇状地扇尖部のうち、5条の南北街路に面する区域を網羅する。

南限については、近世の甲府城下町に組み込まれたために不明な点が多いのが現状である。特に二つの城下町が重複する甲府市北口から武田、朝日一帯の取り扱いが問題となつたが、甲府城三ノ堀跡を一つの境界として設定し、堀の外側を武田城下町遺跡、堀の内側を甲府城下町遺跡と区分した。

しかし、近年の発掘調査によって、現在のJR甲府駅北口周辺までは武田期の遺構・遺物が検出されることから、実際の中世城下町の南限は、かつての一条小山や一蓮寺が存在していたと考えられる甲府城内にまで及んでいたと推測される。

第3節 調査地点周辺の状況

本地点も含めて、大手一丁目地内において各種開発行為に伴う発掘調査が増加傾向にあり、新たな調査成果が蓄積されつつある。本地点一帯は武田氏館から南へ600mほど下った場所に位置し、字名は不明確であるが、北側に字「鍛冶小路」、南側に字「小山田」が残る。「鍛冶小路」は、その名称が示す通り鍛冶職人の居住地を示していると考えられ、南側の「小山田」は、郡内地域の小山田氏の居住地を示すとみられ、大手一丁目付近には職人に關わる城下町、あるいは武士の屋敷が存在した地域と想定されている。

本地点周辺の発掘調査事例では、平成13年度に本地点から200mほど南側で武田城下町遺跡営林署跡地点（図4）が発掘調査されている（甲府市教育委員会2001）。宅地造成に伴う調査によって16世紀中葉から16世紀後半の城下町に關連する遺構群が発見されており、屋敷区画として用いられた溝跡や掘立柱建物跡、墓跡などが検出されている。堀跡と考えられる大型の溝跡が隣地境界に近い調査区南側から発見されており、城下町における区画のあり方を考える上でも重要な成果であったとともに、溝跡から17世紀初頭の陶磁器が出土したことから、中世の溝跡が近世初頭まで利用され、その境界が今まで繼續したことが明らかにされた。

また、平成21年度に入り、その間の大手一丁目4549-1でも本調査が実施され、掘立柱建物跡や井戸跡などが検出されており、何らかの屋敷地が形成されていたことが確認された。同時期に隣接する屋形二丁目34地点における調査においても竪穴建物跡を伴う屋敷地が調査され、溝跡から陶磁器や錢の一括埋納が発見されるなど興味深い成果が得られた。

加えて、平成20年度には本地点と連続する敷地内において発掘調査（甲府市教育委員会2009）を実施した。本地点の調査もその成果によるところが大きいが、溝跡や地形の段造成で区画した複数の屋敷区画とその内側から掘立柱建物跡や井戸跡が検出されており、戦国期の城下町が街路と街路に挟まれた奥地まで整備されていたことを証明することができた。城下町の様相は、遺構の重複関係から概ね2時期と考えられ、出土遺物は16世紀中葉が主体で後半以降のものは極めて少なく、武田氏が対外的に勢力を伸ばした発展期の中で成立し、武田氏滅亡とともに衰退したことが明らかとなり、城下町の成立と終焉を考える上でも大きな成果であった。

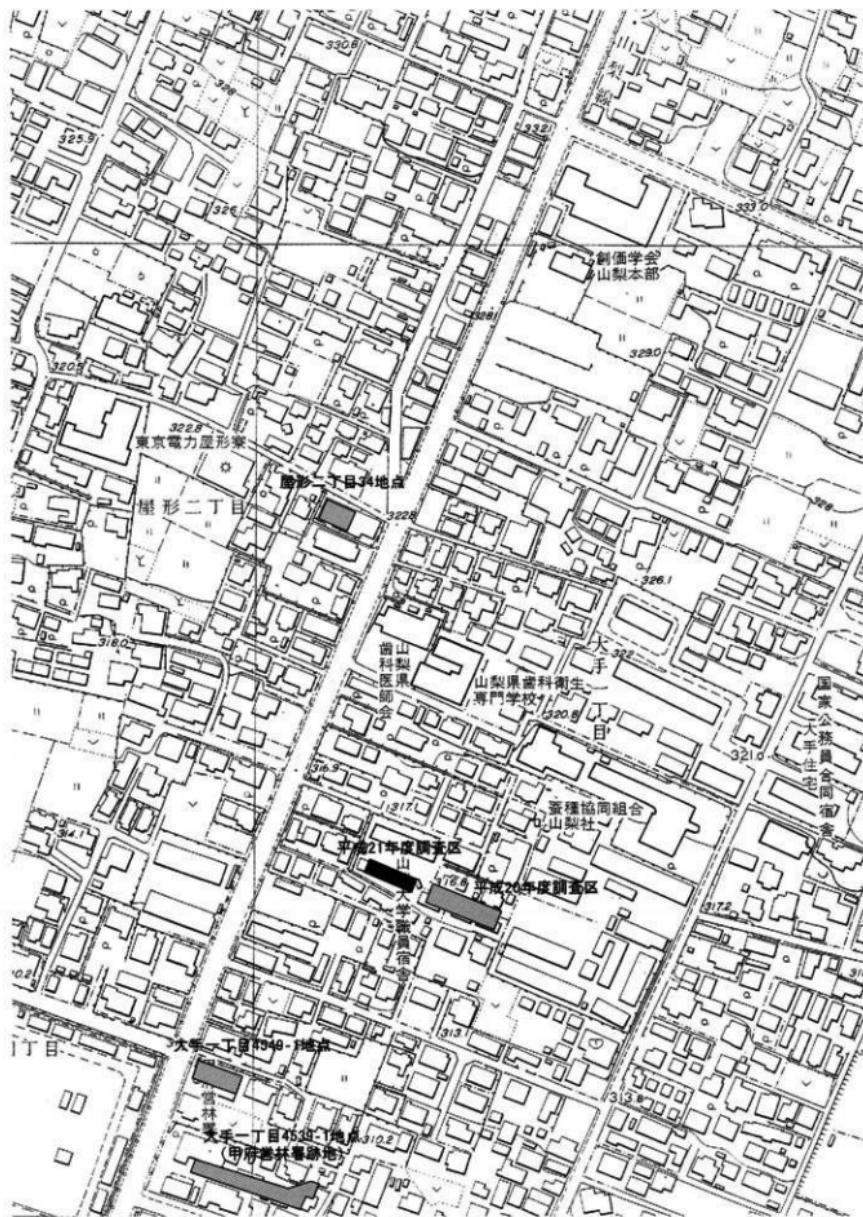


図4 本年度調査区及び周辺調査区位置図

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

周知の埋蔵文化財包蔵地である武田城下町遺跡範囲内において、国立大学法人山梨大学紫道館建設工事に先立ち、平成21年6月19日付けで国立大学法人山梨大学学長前田秀一郎より文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出された。

届出を受けて、甲府市教育委員会と国立大学法人山梨大学（以下、山梨大学という）との間で平成20年度調査地点の成果も踏まえた上で協議を行い、甲府市教育委員会が平成21年7月14日から7月22日までの期間において、遺跡の有無や時代、範囲、内容などを確認するための試掘調査を実施した。試掘調査に関わる費用は、甲府市教育委員会が国庫補助事業費で対応した。

試掘調査の結果、隣接する平成20年度調査地点と同様に中世城下町に関連する遺構・遺物が検出されたため、山梨大学と具体的な協議を行い、発掘調査及びその後の整理作業を含めた原因者側の負担とすることで合意し、平成21年9月14日付けで両者の間で委託契約を締結した。

発掘調査範囲は、建物建設予定地において遺跡確認面に掘削が及ぶ範囲一帯を調査対象地としたが、隣地職員寮関連の施設利用と埋設物なども考慮した上で、調査区東側については調査対象から除外し、工事掘削時の立会い等で対応することとした。現地での発掘調査は平成21年10月1日に着手し、平成21年11月21日には現地を埋め戻して調査を終了した。

第2節 試掘確認調査と基本層序

本地点については、調査以前にはコンクリート2階建ての職員寮が存在していたものの、遺構確認面が比較的深いこともあり、地下の残存状況は良好ではないかと考えられた。試掘調査は、新築建物建設予定地の中央部付近を調査対象範囲として設定した。計画建物は敷地に合わせて東西方向に長い形状であったため、東西方向に約12m、幅2mでトレンチを設定した（図5）。

試掘調査に際しては、平成20年度調査区の掘削深度を参考にしつつ、重機によって慎重に掘削した。部分的に建物基礎解体時のコンクリート片などが混入する厚い搅乱層が存在したが、トレンチ全体としては比較的良好な土層堆積が確認された。全体的に暗褐色土層を主体とし、下層ほど暗い色調に変化とともに、炭化物などの混入が確認された。作業を進めたところ、現地表下約60mから構造に集石が確認され、暗渠ではないかと考えられた。そのため、暗渠が検出された面まで重機で掘削し、それより下層の確認作業については人力で行った。

暗渠検出面で一度遺構確認を行ったものの、明確なものは確認されなかったため、暗渠一帯を掘り残して約80cmまで掘削した。その段階で精査したところ、遺物も比較的多く出土し、溝状の遺構などが確認された。よって、昨年度よりも遺構が検出された高さは低くなっているものの、本地点においても中世城下町に關わる遺跡が包蔵されており、本調査を実施する必要があると判断した。

基本層序については、建物が存在した調査区北側を中心に基盤解体時の搅乱や盛土層が現地表下50~60cm近くまで堆積していたが、調査区南側などは搅乱を受けておらず、現地表下約20cmで水田の耕作土と床土を15cmほど確認することができた。

水田層下には暗褐色土層が堆積していたが、遺構確認の状況からも、暗渠が検出された約60cmとその下層の約80cmで2層の生活面の存在が確認された。遺物はかわらけなどを中心に各層位から出土したが、暗渠確認面下層からはより多くの中世遺物が出土したため、少なくとも現地表下約60cmから80cmまでは中世段階の包含層であると判断した。

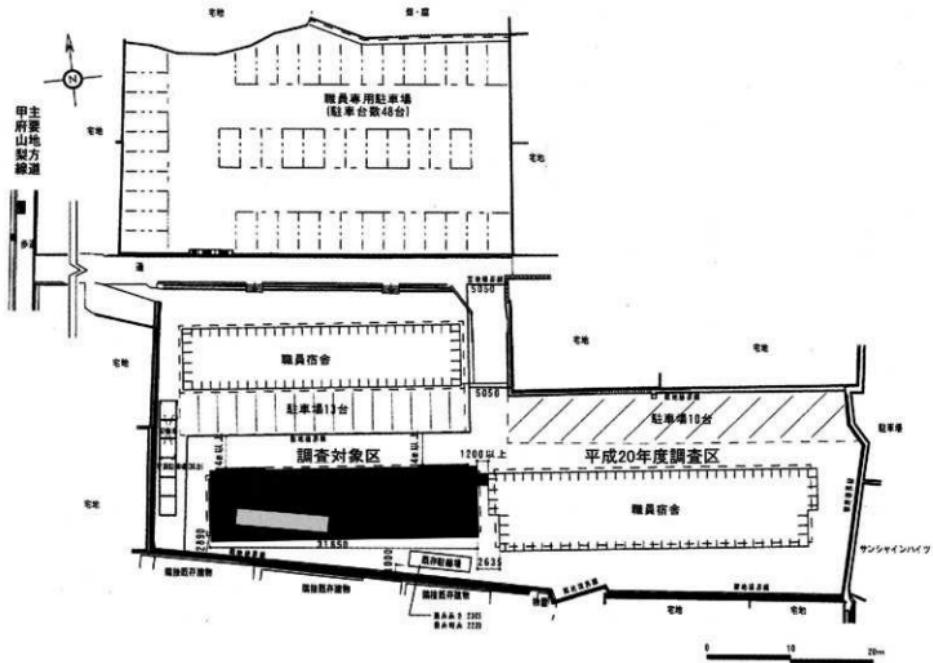


図5 試掘調査トレーニング配置図

第3節 調査の方法

本調査対象面積は約 210 m²であり、大型重機によって一度に掘削を行った。試掘調査成果を基に現地表下約 60cm の暗褐色土層までを重機で掘削し、それより下層はすべて人力により掘削した。

発掘調査に際しては、世界測地系による方眼測量によって 5m × 5m のグリッドを基本単位として設定し、グリッド番号などは平成 20 年度調査区から引き続いて連続した番号を用いることとした（図 6）。よって、東西列を算用数字、南北列をアルファベットで表記したものを組み合わせてグリッド番号として用いており、各グリッド番号は南東隅にあたる杭を基準とし、遺構実測、遺物取り上げ等に際しては、すべてグリッド番号に合わせて記録した。

遺構の調査方法は、土坑・Pit などは基本的に半裁によって土層を確認した上で遺構であるか判断し、写真・図面により記録した。溝跡など大型の遺構については、任意に部分的な土層観察面を設けて写真・図面により記録した。個々の調査がある程度完了したところで、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施し、調査区全体の俯瞰と直上からの写真を撮影するとともに、現地補足等による測点観測を行い、図化した。

第4節 調査の経過

発掘調査の期間は、範囲確認に伴う試掘調査を平成21年7月14日から22日までの期間内で5日間実施し、本調査は平成21年10月1日から11月21日までの期間内で30日間実施している。本調査の主な作業の進捗状況は以下のとおりである。

- 10月1日 本調査範囲設定。重機により調査区掘削。人力により隨時掘削・精査。
10月2日 重機による掘削完了。
(台風18号など天候不良が続く)
10月13日 調査区内方眼測量・水準測量杭打ち。
10月15日 1号暗渠掘削着手。
10月21日 3号暗渠・調査区南黄褐色土帯掘削着手。
10月22日 2号暗渠掘削着手。
10月23日 調査区南畝状溝跡群掘削着手。
10月27日 1号土坑掘削着手。
10月28日 2号土坑掘削着手。
10月29日 3・4号土坑掘削着手。
11月2日 1・2号溝跡、5号土坑掘削着手。
11月3日 6号土坑掘削着手。
11月7日 3号溝跡掘削着手。
11月9日 4号溝跡掘削着手（後に造成層と判明）。
11月10日 7号土坑、1・2号Pit掘削着手。
11月12日 3・4号Pit掘削着手。
11月16日 8号土坑、5号Pit掘削着手。
11月19日 5～9号溝跡、6～9号Pit掘削着手。
11月20日 9号土坑、10～13号Pit掘削着手。ラジコンヘリコプターによる空中写真測量実施。
測量終了後、重機による埋め戻し開始。
11月21日 全体の埋め戻し、整地を終えて発掘調査完了。
11月24日 現場機材等を撤去し、現地での作業を完了。
12月17日 東側の一部未調査箇所について建物基礎掘削時に立会を実施。

第5節 調査後の処置

発掘調査によって得られたコンテナ2箱分の出土遺物は、平成21年11月30日付けで甲府警察署長宛に遺失物法に基づく埋蔵物発見届を提出するとともに、山梨県教育委員会教育長へ保管証を提出し、平成21年12月16日付け教文第2574号により正式に出土品の帰属と文化財としての認定がなされた。合わせて、発掘調査成果については、本書に先駆けて概要報告書をまとめ、平成21年12月2日付け教発第1338号で山梨大学に提出した。

室内整理作業及び報告書作成作業については、甲府市山宮甲文館において出土遺物の洗浄、注記、接合後に実測作業を行い、図化したものを淨書するとともに写真撮影し、図版作成を行っている。現場での記録写真等についても整理するとともに、図版作成を行い本書の刊行に至っている。

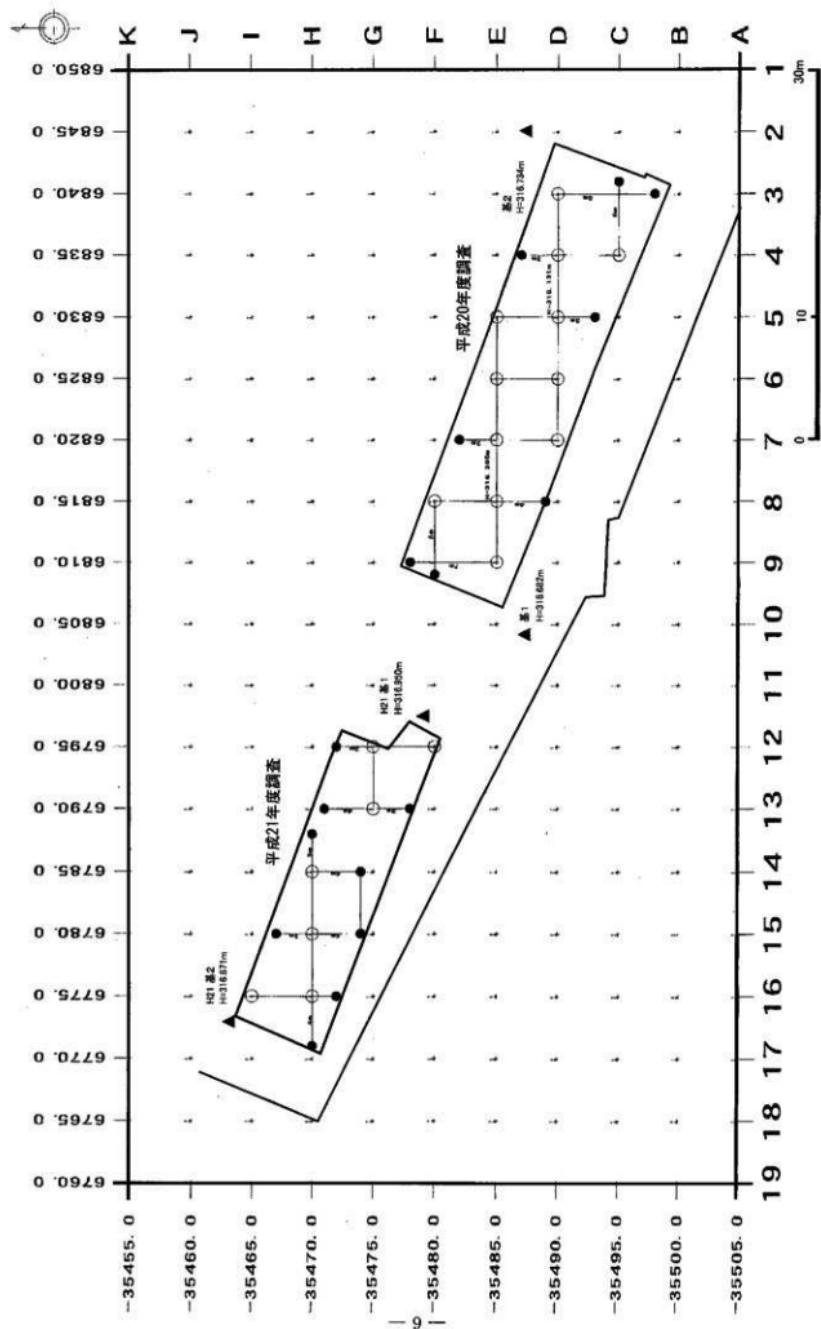


図6 調査区グリッド配置図

第3章 遺構と遺物

今回実施された調査区内からは、溝跡 9 条、土坑 9 基、Pit13 基（うち掘立柱建物跡 1）である。主に 16 世紀中葉から 16 世紀後半の遺構は中世城下町関連、17 世紀後半から 18 世紀前半の江戸期の遺構は調査区一帯が農地化した際に構築されたものと考えられる。

第1節 暗渠・歓跡

1号暗渠（遺構：図 7 遺物：図 13）

位置：F - 14、G - 14、I - 13 グリッド

検出状況：試掘調査で確認されていた暗渠であり、南北方向に延びるが南側で東へと折れる。

確認した段階では小礫が充填されていたが、除去すると、その下から配石の水路上に被せられた暗渠の蓋となる石列が検出された。

検出範囲内の規模は、全長約 8.0m、幅約 1.0m で北側から南側へ向かって傾斜しており、2 号暗渠付近まで流末が延びていたことから、2 号暗渠は排水していた可能性がある。時期的には戦国期の遺構群より高い層位にあり、江戸期になってから周囲の耕地化に伴い排水施設として埋設されたものと考えられる。

重複関係：2・4号溝跡、7号土坑、歓跡より新しい。

出土遺物：図化したのは 1 の熔融物付着のかわらけであるが、ほかには小片のかわらけが 12 点出土している。

2号暗渠（遺構：全体図中 遺物：図 13）

位置：F - 13、G - 13 グリッド

検出状況：南北方向に延びる暗渠であり、垂直に掘り込まれた溝の中に大小の小礫が多量に充填されていた。調査中も絶えず北側から水が流れ込んでおり、暗渠のすべてを掘削することはできなかつたため、配石などの存在も確認できなかつたが、1 号暗渠とは様相が異なる暗渠であると考えられた。

検出範囲内の規模は、全長約 7.5m、幅約 1.0m で、深さは確認面から約 0.4m 掘削したが、前述のとおり完掘はしていない。出土遺物の中に近世陶磁器が確認されたことから江戸期の遺構と断定した。

重複関係：2・4号溝跡、6号土坑より新しい。

出土遺物：3 の産み石は類例から考えて戦国期の可能性が高いが、2 のかわらけは 17 世紀代のものと考えられる。図化していないが、17 世紀後半と考えられる美濃産の香炉片も出土していることから、時期的には幅を持たせて 17 世紀後半から 18 世紀前半の遺構と考えられる。

3号暗渠（遺構：図 7 遺物：なし）

位置：H - 16、I - 16 グリッド

検出状況：南北方向に延びる暗渠であり、確認面から小礫が充填されていた。住宅基礎解体時の搅乱などもあり、残存状況が悪かったが、調査区南側では確認されていないことから、流末がどこに向っていたのかは定かではない。

検出範囲内の規模は、全長約 6.5m、幅は東側で約 0.5m、西側で約 0.9m であり、掘り方も約 0.1m と浅く、小礫のみで配石などは確認されなかつた。

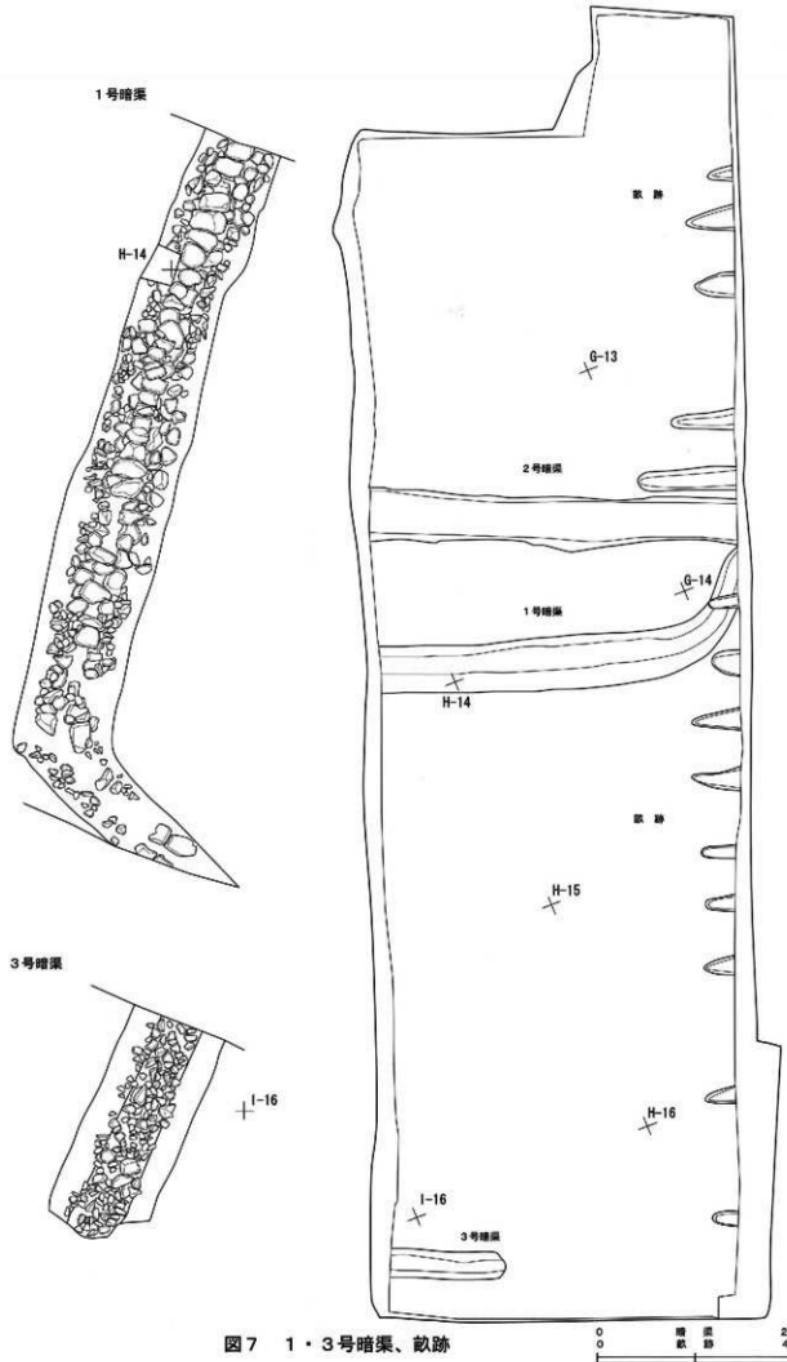


图7 1·3号暗渠、断层

重複関係：2号溝跡より新しい。

出土遺物：なし。

跡跡（遺構：図7 遺物：なし）

位 置：調査区南側一帯

検出状況：調査区南壁際で南北方向に検出された細長い溝群である。西側では土壌状に盛られた黄褐色土帶の下層から検出されており、覆土には黄褐色土や小礫などが多く混ざっていた。深さ約0.1m前後の溝跡が一定間隔で連続することから畑の畝と考えられる。

重複関係：他遺構より新しい。

出土遺物：なし。

第2節 溝跡

1号溝跡（遺構：図8 遺物：図13・15）

位 置：F - 11・12 グリッド

検出状況：東西方に延びる溝跡であり、東側は調査区外に延び、西側は搅乱として扱ったが、宅地造成前まで使用されていたと考えられる南北方向の石積みの水路部分で途切れていた。あくまで推測であるが、搅乱とした水路の前身が中世段階から存在したか、あるいは6号溝跡と接続したどちらかであったと考えられる。

遺構上層の覆土は暗褐色であったものの、全体にやや黄褐色のようにも見えたため、最も早くから確認されていた溝跡であり、遺構形状は明瞭であった。検出範囲内の規模は、全長約6.5m、幅は東側で約0.5m、西側で約0.9mであり、深さは約0.3mで東から西へ傾斜していた。下層には砂の堆積はなかったことから、敷地境界や雨水などの排水用の開渠であったと考えられる。

重複関係：7・9号溝跡、5号土坑、Pit1・8・11より新しい。

出土遺物：4・5はかわらけで、49は上層から出土した旧石器時代の水晶製のナイフ形石器である。ほかにはかわらけ片が1点出土しているのみである。

2号溝跡（遺構：図9 遺物：図13～15）

位 置：G - 12～14、H - 13～16 グリッド

検出状況：調査区を横断するように東西方に延びる溝跡であり、G - 13 グリッドから西側の溝跡覆土には焼土塊や炭化物が多量に堆積していた。武田氏館跡を始めとする周辺の中世遺跡出土の焼土塊と比べ、今回出土した焼土塊は土壁のような壁体としての面が見られず、板状圧痕も見られなかった。加えて、粘土内にはスサなどの混入物も少ないことから、建物の壁体としてではなく、窯や炉などの簡易な構造物の壁体であった可能性が高いと考えられ、何らかの理由で溝の廃絶に際して投棄されたと思われる。

検出範囲内の規模は、全長約24.5m、幅は東側で約1.0m、中央付近で約2.3m、西側で約2.7mであった。深さは検出面から東端で約0.1m、西端で約0.4mであり、東から西へ傾斜していた。さらに、溝跡中央付近南側には明瞭な段差があり、覆土堆積状況から1、2度の掘り直しがあったと考えられる。焼土塊が含まれていなかつたG - 12 グリッド一帯は、掘り直し以前の初期の2号溝跡に伴い、早い時期に廃絶したと解釈される。溝跡の性格は、敷地境界の排水用開渠であったと考えられる。

重複関係：3・4号土坑より古く、3・6・7・8号溝跡、Pit2・6・7より新しい。

出土遺物：遺物量は遺構の中では最多の72点の遺物が出土しており、その多くは焼土塊堆積層から得られた。図化したものは6～13までがかわらけ、14～16までが大窓段階の

灰釉陶器皿、17が印刻の火鉢、18~21までが土器擂鉢、22が茶臼であり、ほかに金属製品として52の銅塊と53の釘が出土している。

特筆すべきものとしては、53の墓石状の銅塊がある。銅塊上部は柘榴石状にヒビ割れ、底部はクレーター状に発泡しているものの、全体的に表面は滑らかに仕上げられている。底部付近は人工的に整形されており、形状を観察するかぎりでは、熔融物付着土器などによって精製されたようにもみえる。分析結果は寄稿いただいているが、純度の高い銅塊であることが明らかになっており、古錢などを二次的に鋳造したものではなく、意図的に純銅を作り出したと考えられ、大変興味深い資料である。

3号溝跡（遺構：図9 遺物：なし）

位 置：H-14グリッド

検出状況：南北方向に延びる溝跡であり、2号溝跡によって分断される形で検出された。北壁から検出され、南側は4号溝跡に接続することから、検出範囲内の規模は、全長約3.4m、幅約2.5mで、深さは約0.2mと浅く、性格等は不明である。

重複関係：2号溝跡より古く、4号溝跡と同時期か。

出土遺物：なし。

4号溝跡（遺構：図9 遺物：図15）

位 置：G-13~15、H-15グリッド

検出状況：東西方向に延びる溝跡であり、1号溝跡の延長ではないかと考えたが、微妙な軸線の違いや堆積土、溝の規模等を考慮し、別遺構とした。調査当初は整地層の堆積によって遺構の形状も不明瞭であり、自然堆積とみられる土層状況から覆土だけでは遺構の判別が困難であったため、何箇所かに設定したサブトレンチによって溝跡延長を掘み、それを手掛かりに掘削を行った。

西側は8号溝跡と接し、東側は6号土坑などと重複するため不明瞭であるが、1号溝跡と同様に6号溝跡が隣接する擾乱とした水路周辺に帰結したと推測される。検出範囲内の規模は、全長約16m、幅約1.1~1.8mであった。深さは約0.2mでU字断面の溝跡であった。

重複関係：4・6・7号土坑より古い。

出土遺物：54は小札であり、他にかわらけ片14点、土器擂鉢片6点、内耳錫片が1点出土しているが、土器等で図化可能なものはない。

5号溝跡（遺構：図8 遺物：なし）

位 置：G-12グリッド

検出状況：東西方向に延びるが、北側半分は調査区外に展開する。6号溝跡と接合することから同時期の遺構と考えられるが、検出範囲内の規模は、全長約5.3mであり、深さは深い場所で約0.1mであった。

重複関係：1・2号土坑より古く、7号溝跡より新しい。

出土遺物：なし。

6号溝跡（遺構：図8 遺物：図14）

位 置：F-13、G-12グリッド

検出状況：調査区を縦断するように南北に延びる溝跡であり、宅地造成直前まで使用されていたと考えられる石積みの水路によって南側は一部破壊されていた。検出範囲内の規模

は、全長約7.3m、幅は残存していた北側で約0.7mであった。深さは約0.25mで、北から南へ傾斜していた。自然堆積であるが、砂層の堆積がないことから敷地境界か雨水などの排水用の開渠であったと考えられる。

重複関係：2号溝跡、6号土坑より古い。5号溝跡と接続することから、同時期と考えられる。

出土遺物：23はかわらけであり、図化できなかつたが、ほかにかわらけ片6点と瀬戸美濃大窯段階の擂鉢片が1点出土している。

7号溝跡（遺構：図8 遺物：掲載なし）

位置：F-12、G-12グリッド

検出状況：南北方向に調査区を縦断する溝跡であり、検出範囲内の規模は、全長約7.6m、幅は北側で約0.5m、南側で約1.0mであった。深さは約0.25mで北から南へ勾配があり、屋敷地境界か雨水などの排水用の開渠であったと考えられる。

重複関係：1・2・5溝跡、8号土坑、Pit2・4・5・11・13より古い。

出土遺物：かわらけ片が1点のみ出土している。

8号溝跡（遺構：図9 遺物：なし）

位置：H-15グリッド

検出状況：南北方向に延びる溝跡であり、北側は調査区外へと延びるが、南側は4号溝跡と接続した後、一部南側に突き抜けるように延びていたが、末端は明確に確認できなかつた。検出範囲内の規模は、全長約5.7m、幅約1.1mで、深さは0.2mであった。断面形などは4・8号溝跡と同じでU字形であった。底面には砂などの堆積ではなく、敷地境界や雨水の排水用の開渠であったと考えられる。

重複関係：2号溝跡、3・4号土坑より古く、4号溝跡と同時期。

出土遺物：なし。

9号溝跡（遺構：図8 遺物：図14）

位置：F-12グリッド

検出状況：調査区東端部で南北方向に検出された溝跡であり、遺構の大部分は調査区外に展開していると考えられる。2号溝跡と同様、遺構覆土中に多量の炭化物と焼土塊が含まれていた。検出範囲内の規模は、全長は約2.8m、幅1.4mであり、深さは約0.15mの浅い溝跡であった。時期的には堆積土等から2号溝跡と同時期と考えられる。

重複関係：1号溝跡、5号土坑、Pit1より古く、Pit10より新しい。

出土遺物：焼土塊のほか24の脚付香炉が1点出土している。

第3節 土坑

1号土坑（遺構：図10・遺物：掲載なし）

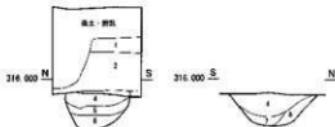
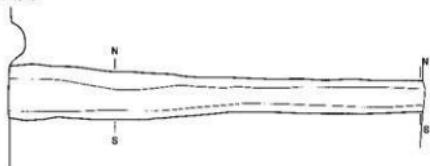
位置：G-12グリッド

検出状況：調査区北壁際で発見された土坑であり、遺構の南半分のみの掘削であったため、遺構平面形は円形ないしは楕円形になるものと考えられる。検出範囲内の規模は、長軸で約1.65mであった。出土遺物も少なく、用途は不明である。

重複関係：5号溝跡より新しい。

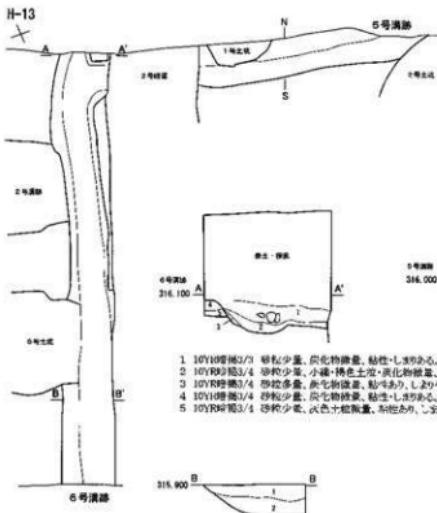
出土遺物：小片ではあるが、かわらけ3点、火鉢1点が出土している。

1号溝跡



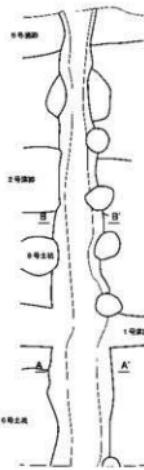
1. 10Y10帶標3/3 砂粘・小礫少量、炭化物微量、粘性・しまりある。
 2. 10Y10帶標3/3 砂粘少量、炭化物微量、粘性やや強く、しまりある。
 3. 10Y10帶標3/3 砂粘少量、炭化物微量、粘性・しまりある。
 4. 10Y10帶標3/3 砂粘上砂量、砂粘少量、小礫・炭化物微量、粘性やや強く、しまりある。
 5. 10Y10帶標3/3 砂粘多量、褐色土被少量、小礫・炭化物微量、粘性・しまりある。
 6. 10Y10帶標3/3 砂粘・炭化物少量、風化・強度・粘性やや強く、しまりある。
 7. 10Y10帶標3/3 砂粘多量、褐色・炭化物少量、粘性あり、しまりやや弱い。
 8. 10Y10帶標3/3 砂粘多量、炭化物微量、粘性・しまりある。
- (4~8号) 1号溝跡

5・6号溝跡

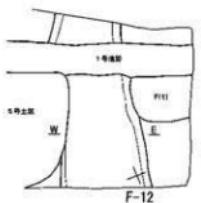


1. 10Y10帶標3/3 砂粘少量、炭化物微量、粘性・しまりある。
 2. 10Y10帶標3/3 小礫・褐色土被・炭化物微量、粘性あり、しまりやや強い。
 3. 10Y10帶標3/4 砂粘多量、炭化物微量、粘性あり、しまりやや強い。
 4. 10Y10帶標3/4 砂粘少量、炭化物微量、粘性あり、しまりやや強い。
 5. 10Y10帶標3/4 砂粘少量、灰白色土被微量、粘性あり、しまりやや強い。
- 6号溝跡

7号溝跡



9号溝跡



1. 10Y10帶標3/3 砂粘少量、炭化物多量、褐色土被少量、粘性・しまりある。
2. 10Y10帶標3/4 砂粘少量、炭化物少量、褐色土被微量、粘性あり、しまりやや強い。



1. 10Y10帶標3/3 砂粘少量、炭化物多量、褐色土被少量、粘性・しまりある。
2. 10Y10帶標3/4 砂粘少量、炭化物少量、褐色土被微量、粘性あり、しまりやや強い。



D 0
断面図 平面図
2m 4m

図8 1・5・6・7・9号溝跡

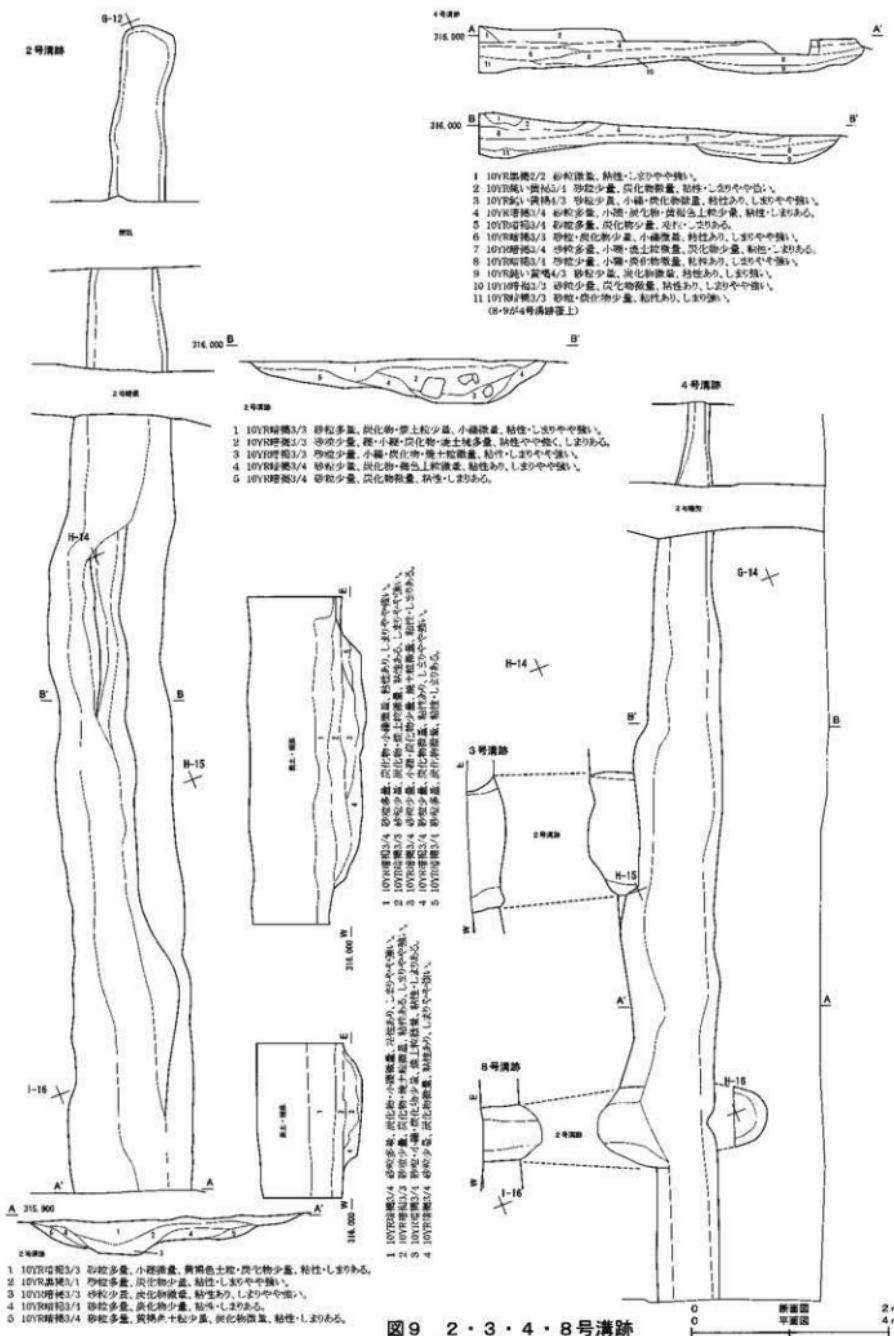


圖 9 2·3·4·8 号溝跡

2号土坑（遺構：図10・遺物：図14）

位置：B-5グリッド

検出状況：調査区東壁際で発見された土坑であり、遺構の西側のみ検出されており、平面形は円形ないしは梢円形になるものとみられる。検出範囲内の規模は、長軸約2.1mであり、掘り込みも約0.2mと浅かった。一部に礫も見られたが用途は不明である。

重複関係：4号溝跡より新しい。

出土遺物：25のかわらけのほか小片2点と、瀬戸美濃大窯段階の灰釉皿1点が出土している。

3号土坑（遺構：図10・遺物：掲載なし）

位置：H-15グリッド

検出状況：覆土上層に小礫を多量に含む土坑である。小礫層は4号土坑まで連続していたために廃絶は同時期と判断されたものの、掘り込みは個別に確認されたことから、異なる遺構と判断してそれぞれに遺構番号を付した。遺構平面形は隅丸長方形であり、検出範囲内の規模は、長軸約2.6m、短軸約1.65m、深さは約0.2mであり、用途などは不明である。

重複関係：2号溝跡より新しく、4号土坑と同時期。

出土遺物：かわらけ片が6点出土しており、うち1点は熔融物が付着していた。

4号土坑（遺構：図10・遺物：なし）

位置：H-15グリッド

検出状況：3号土坑と重複するように検出された土坑であり、上層には3号土坑から連続する小礫層が堆積していた。遺構平面形は円形であり、検出範囲内の規模は、長軸約1.0m、短軸約1.1m、深さ約0.2mと浅く、用途などは不明である。

3号土坑同様に用途などは不明である。

重複関係：2号溝跡より新しい。3号土坑と同時期。

出土遺物：なし。

5号土坑（遺構：図10・遺物：図14）

位置：F-12グリッド

検出状況：調査区東側で確認された土坑で、上層で集石が検出されていたことから、当初は集石墓ではないかと考えられたが骨片などもなく、用途は不明であった。遺構平面形は円形で、検出範囲内の規模は、長軸約2.0m、短軸約1.8mで、深さは0.15mと浅かった。

重複関係：1号溝跡より古く、9号溝跡より新しい。

出土遺物：26のかわらけ1点と27の瀬戸美濃灰釉陶器皿1点が出土している。

6号土坑（遺構：図11・遺物：掲載なし）

位置：F-13・G-13

検出状況：西側は2号暗渠開削時に破壊されていたものの、東側には部分的に配石がなされていた。遺構平面形は梢円形と考えられ、検出範囲内の規模は、長軸約1.9m、短軸約1.7mであり、深さは0.2mであった。配石の状況から墓坑の可能性も想定されたが、物証はないことから性格や用途は不明である。

重複関係：2号暗渠より古く、4号溝跡より新しい。

出土遺物：かわらけ片が1点出土しているのみである。

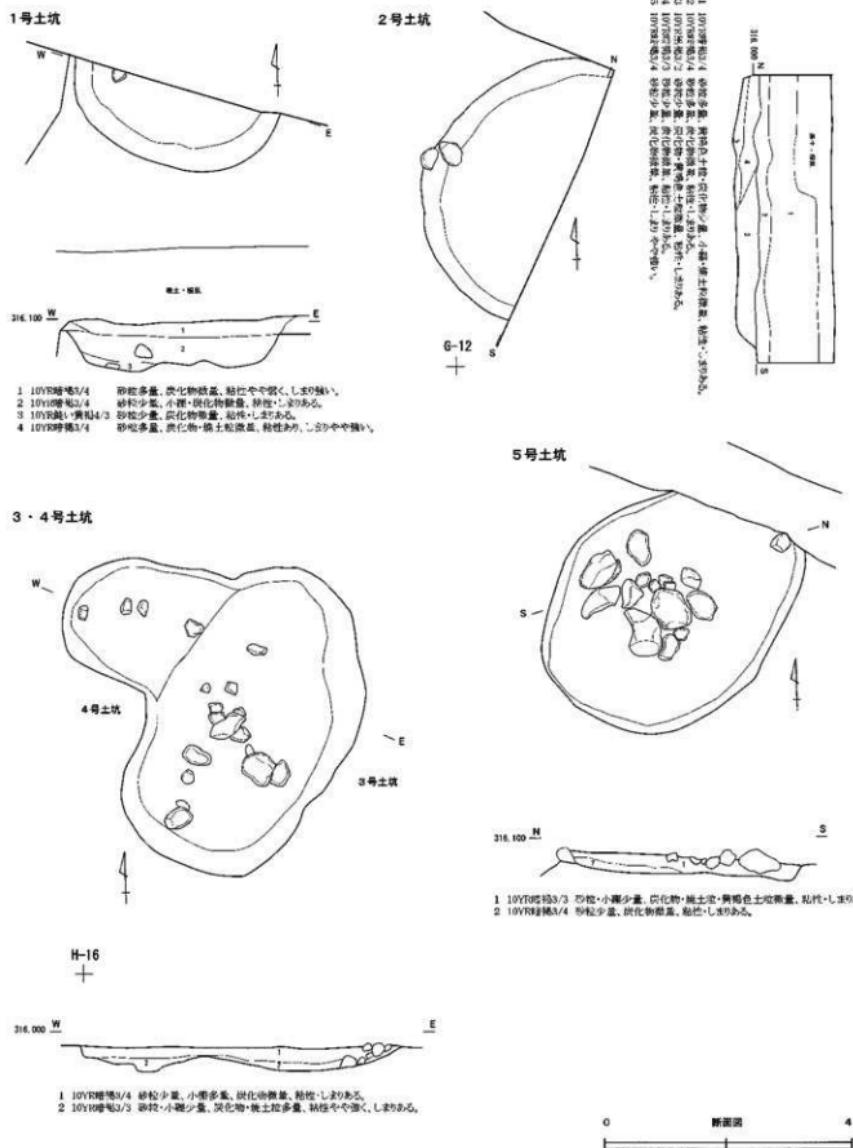


図10 1～5号土坑

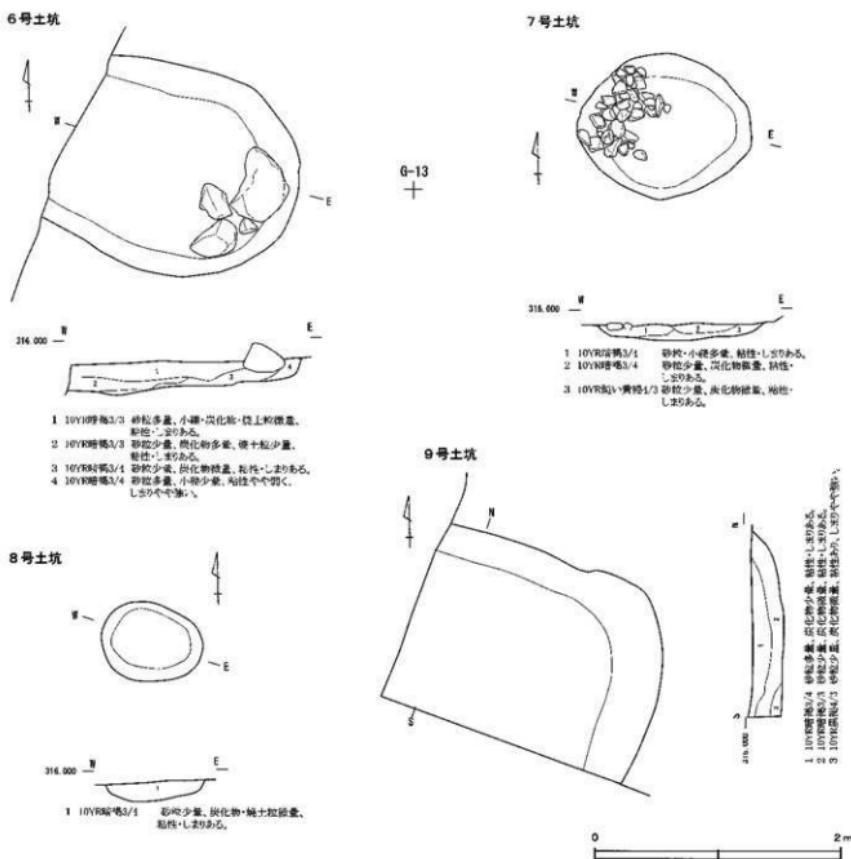


図11 6～9号土坑

7号土坑（遺構：図11・遺物：なし）

位 置：G - 14 グリッド

検出状況：1号暗渠下層から検出された土坑であり、上層には小礫が多量に含まれていた。遺構平面形は円形、または隅丸方形で、検出範囲内の規模は、長軸約1.35m、短軸約1.2mであり、深さは約0.1mと浅く、用途は不明である。

重複関係：1号暗渠より古く、2・4号溝跡より新しい。

出土遺物：なし。

8号土坑（遺構：図11・遺物：なし）

位置：F-12グリッド

検出状況：遺構平面形は橢円形であり、検出範囲内の規模は、長軸約0.8m、短軸約0.65mであり、深さは0.15mと浅かった。1号掘立柱建物跡内側に位置するが、建物跡との共伴関係は不明である。

重複関係：7号溝跡より新しい。

出土遺物：なし。

9号土坑（遺構：図11・遺物：掲載なし）

位置：F-12・13グリッド

検出状況：遺構の南側は調査区外に展開しているが、遺構平面形は円形、または隅丸方形と考えられる。検出範囲内の規模は、長軸約2.1m、短軸約1.6m、深さ約0.25mである。用途などは不明である。

重複関係：7号溝跡より新しい。

出土遺物：かわらけ片が1点出土しているのみである。

第4節 掘立柱建物跡・Pit

掘立柱建物跡については、記載する規模や柱間はすべて中心からの距離で計測している。

1号掘立柱建物跡（遺構：図12 遺物：図14）

位置：F-12・G-12グリッド

主軸方位：N-15°-E 柱穴：Pit2・4・7・8・11・12

検出状況：柱穴平面形は円形とみられ、Pit12に関しては形状や深さが異なることから同一遺構であるかは疑問である。南北軸約1.75m、東西軸はPit2・7間で1.85m、Pit8・11間で約1.95mを測る。

重複関係：1・2号溝跡より古く、7号溝跡より新しい。8号土坑との新旧関係は不明である。

出土遺物：Pit12から28・29を含むかわらけ片5点が出土している。

第5節 遺構外出土遺物ほか（遺物：図14・15）

遺構外の多くは、G-14・15の4号溝跡上の整地層内からの出土であり、熔融物付着土器の出土が多いのもこの一帯からである。試掘調査段階の遺物もほぼ両グリッドに該当し、調査全体の遺物量のうち、約3分の1を占める出土量があった。

掲載遺物のうち、焼き物は30~48までが遺構外の遺物であるが、28~40がかわらけであり、うち37~40が熔融物付着土器である。41は土器火鉢の口縁であり、17の火鉢と近似する。

陶磁器では、42は天目茶碗、43・44が瀬戸美濃灰釉皿、45・46が中国青磁であり、45は平成20年度調査区も合わせて唯一の青磁大型品である。47は近世瀬戸灰釉碗、48は須恵器甕片である。金属製品は、遺構外では55~59は古銭である。古銭のうち57~59は試掘調査時にまとめて出土しており、そのうち、57と59の間に挟まれていた58は、一部が二次被熱していた。

1号掘立柱建物跡

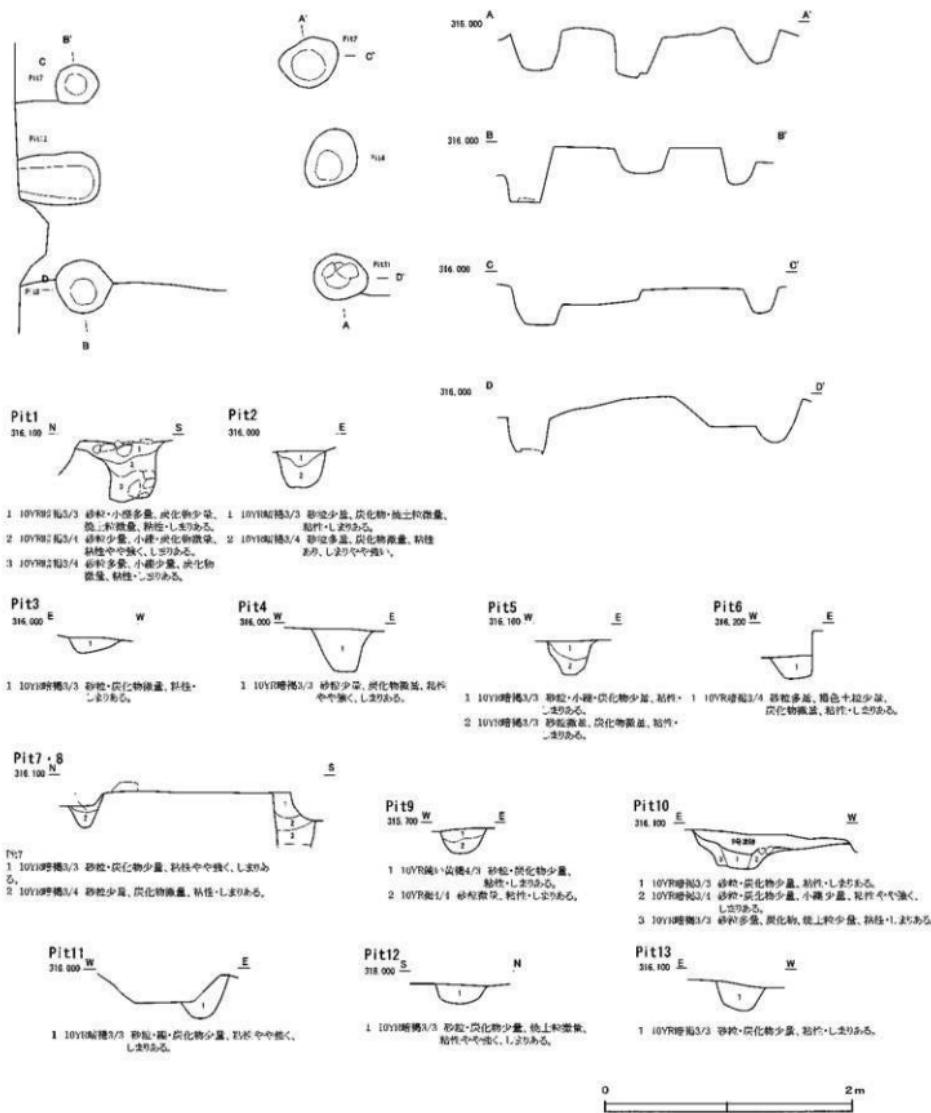


図12 1号掘立柱建物跡・Pit 1 ~ 13

出土遺物観察表

単位: cm

図版番号	番号	位置・造構	種類	器種等	生産地等	法 口 径 深 度 底 径			色調	焼成	備考
						径	高	底			
図13	1	1号縫跡	土器	かわらけ	在地	(11.0)	-	-	10Y オリーブ灰6/2	良好	熔融物付着
図13	2	2号縫跡	土器	かわらけ	在地	-	-	(6.0)	7.5YR 純い橙6/4	良好	
図13	3	2号縫跡	石製品	僅み石	在地	7.2	8.2	幅11.6			
図13	4	1号縫跡	土器	かわらけ	在地	-	-	(6.6)	7.5YR 橙7/6	良好	
図13	5	1号縫跡	土器	かわらけ	在地	-	-	(6.7)	5YR 橙6/6	良好	
図13	6	2号縫跡	土器	かわらけ	在地	-	-	5.2	7.5YR 純い橙6/4	良好	
図13	7	2号縫跡	土器	かわらけ	在地	(11.0)	-	-	7.5YR 純い橙6/4	良好	
図13	8	2号縫跡	土器	かわらけ	在地	(10.2)	-	-	5YR 純い橙6/4	良好	
図13	9	2号縫跡	土器	かわらけ	在地	(10.4)	(2.1)	(5.8)	5YR 純い橙6/4	良好	
図13	10	2号縫跡	土器	かわらけ	在地	-	-	6.2	7.5YR 純い橙6/4	良好	
図13	11	2号縫跡	土器	かわらけ	在地	-	-	(6.0)	10YR 純い黄橙7/4	良好	
図13	12	2号縫跡	土器	かわらけ	在地	-	-	(6.0)	7.5YR 純い橙6/4	良好	
図13	13	2号縫跡	土器	かわらけ	在地	(7.2)	1.7	(4.8)	7.5YR 純い褐5/4	良好	
図13	14	2号縫跡	陶器	灰輪皿	鹿戸美濃	(11.0)	-	-	7.5YR 灰白8/1	良好	
図13	15	2号縫跡	陶器	灰輪皿	鹿戸美濃	-	-	(5.8)	10YR 灰白8/1	良好	刻印
図13	16	2号縫跡	陶器	灰輪皿	鹿戸美濃	-	-	(7.0)	10YR 灰白8/2	良好	
図13	17	2号縫跡	土器	火鉢	在地	(40.8)	-	-	7.5YR 純い橙6/4	良好	刻印
図13	18	2号縫跡	土器	擂鉢	在地	-	-	-	5YR 橙6/6	良好	
図13	19	2号縫跡	土器	擂鉢	在地	-	-	-	5YR 純い橙6/4	良好	
図13	20	2号縫跡	土器	擂鉢	在地	-	-	-	7.5YR 純い橙6/4	良好	
図14	21	2号縫跡	土器	擂鉢	在地	-	-	(19.4)	5YR 純い橙6/4	良好	
図14	22	2号縫跡	石製品	糸臼(受皿)	在地	-	-	-	-	-	燃付着
図14	23	6号縫跡	十器	かわらけ	在地	(6.6)	1.7	(4.0)	7.5YR 純い橙6/4	良好	
図14	24	9号縫跡	十器	脚付香炉	在地	(7.0)	-	-	7.5YR 純い橙6/4	良好	
図14	25	2号土坑	十器	かわらけ	在地	-	-	(5.8)	5YR 純い赤褐5/4	良好	
図14	26	5号土坑	十器	かわらけ	在地	(15.4)	-	-	5YR 橙6/6	良好	
図14	27	5号土坑	陶器	灰輪皿	鹿戸美濃	-	-	(5.8)	2.5YR 灰白8/1	良好	
図14	28	Pit12	十器	かわらけ	在地	-	-	(7.0)	7.5YR 純い橙7/4	良好	口縁燃付着
図14	29	Pit12	十器	かわらけ	在地	(11.4)	-	-	10YR 暗灰5/1	良好	熔融物付着
図14	30	G-14	十器	かわらけ	在地	(7.0)	1.6	3.4	7.5YR 純い橙7/1	良好	
図14	31	G-15	十器	かわらけ	在地	(6.8)	1.8	3.8	5YR 純い橙6/4	良好	
図14	32	G-15	十器	かわらけ	在地	-	-	3.8	7.5YR 純い橙6/4	良好	
図14	33	G-15	十器	かわらけ	在地	(11.0)	2.0	6.0	10YR 黒2/1	良好	
図14	34	H-16	十器	かわらけ	在地	-	-	(5.8)	5YR 純い赤褐5/4	良好	
図14	35	H-16	十器	かわらけ	在地	(12.6)	3.0	6.4	7.5YR 純い橙7/4	良好	
図14	36	調查区	十器	かわらけ	在地	7.8	2.0	5.0	7.5YR 純い橙7/4	良好	口縁燃付着
図14	37	G-14	十器	かわらけ	在地	(12.4)	-	-	2.5YR 灰黄6/2	良好	熔融物付着
図14	38	G-15	十器	かわらけ	在地	-	-	(6.0)	2.5YR 灰黄5/2	良好	熔融物付着
図14	39	G-15	十器	かわらけ	在地	(10.6)	2.2	(6.0)	10YR 橙6/1	良好	熔融物付着
図14	40	G-16	十器	かわらけ	在地	-	-	(7.0)	10YR 灰黄褐6/2	良好	熔融物付着
図14	41	G-11	土器	火鉢	在地	-	-	-	7.5YR 純い橙7/6	良好	刻印
図14	42	G-15	陶器	天日茶碗	鹿戸美濃	-	-	-	10YR 洗黄褐8/3	良好	
図14	43	G-14	陶器	灰輪皿	鹿戸美濃	-	-	(8.6)	7.5YR 灰白8/1	良好	
図14	44	H-14	陶器	灰輪皿	(9.8)	-	-	-	7.5YR 灰白8/1	良好	
図15	45	G-13	磁器	青磁花瓶	中国	-	-	-	7.5YR 灰白7/1	良好	刻印
図15	46	G-16	磁器	青磁花瓶	中国	(12.0)	-	-	10YR 灰6/1	良好	
図15	47	H-13	陶器	灰輪碗	鹿戸美濃	-	-	(7.6)	10YR 灰白6/1	良好	近世
図15	48	G-14	須恵器	壺	在地	-	-	-	2.5YR 灰黃6/4	良好	古代
図15	49	I号縫跡	石製品	ナイフ形石器	-	-	-	-	-	-	水晶
図15	50	G-15	石製品	ナイフ形石器	-	-	-	-	-	-	黒曜石
図15	51	調査区	石製品	洞片石器	-	-	-	-	-	-	黒曜石
図15	52	2号縫跡	金属製品	鋼塊	-	-	-	重5.7	-	-	
図15	53	2号縫跡	金属製品	釘	-	-	-	重1.2	-	-	
図15	54	4号縫跡	金属製品	小丸	-	-	-	重1.7	-	-	
図15	55	G-15	金属製品	古鏡	-	径2.46	厚0.11	重1.2	-	-	奈良通寶
図15	56	H-16	金属製品	古鏡	-	径2.35	厚0.2	重2.1	-	-	経聖元寶
図15	57	試掘調査	金属製品	古鏡	-	径2.35	厚0.1	重2.4	-	-	淳化元寶
図15	58	試掘調査	金属製品	古鏡	-	径2.33	厚0.12	重2.8	-	-	神草元寶?
図15	59	試掘調査	金属製品	古鏡	-	径2.42	厚0.44	重2.1	-	-	皇宋通寶

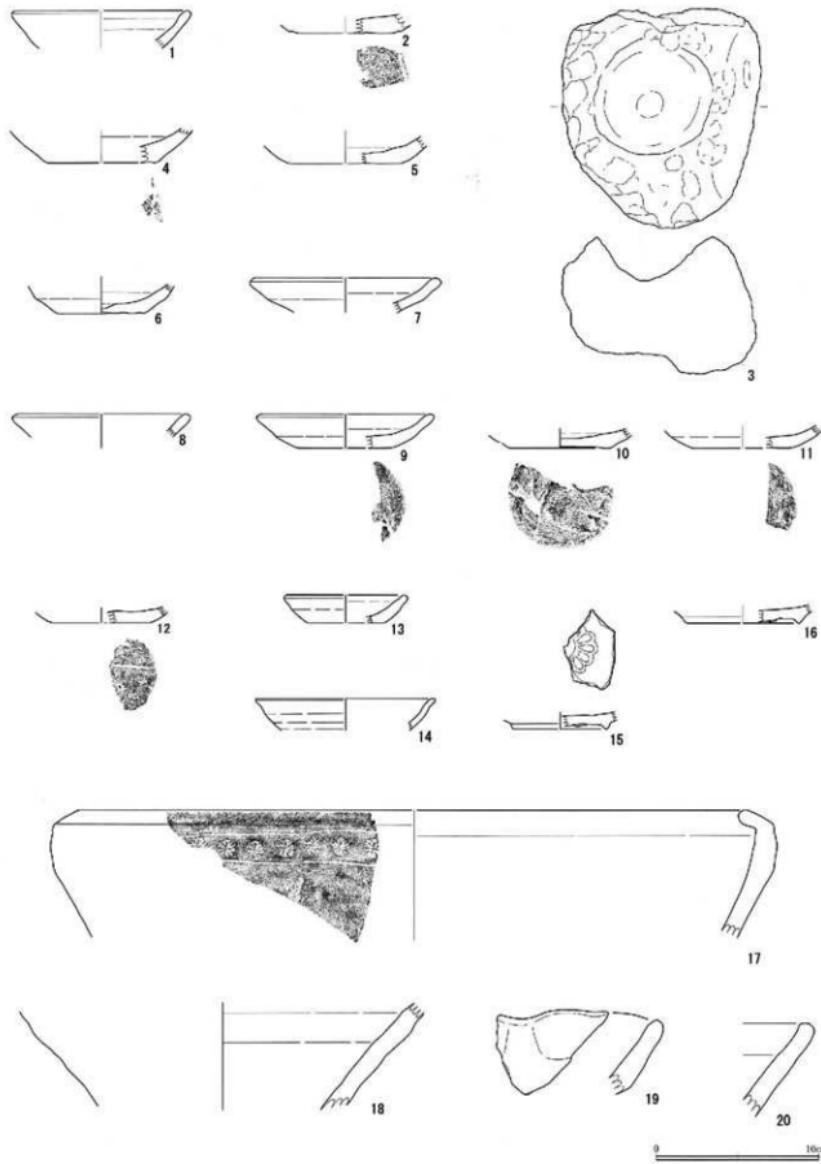


図 13 1・2号暗渠、1・2号溝跡出土遺物

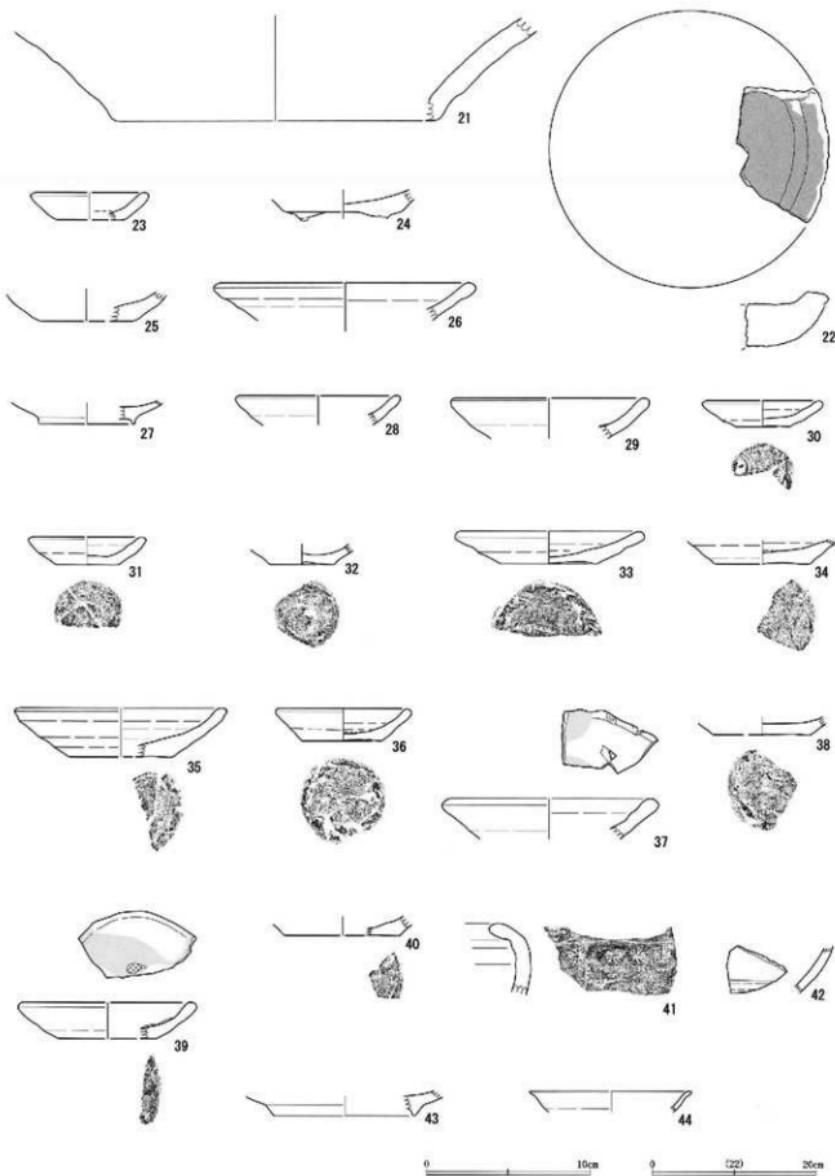
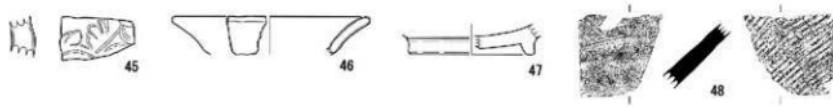
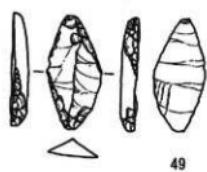


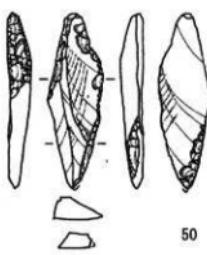
図14 2・6・9号溝跡、2・5土坑、Pit12 調査区出土遺物



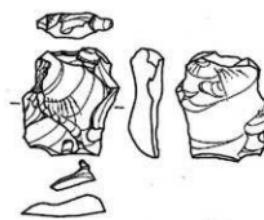
0 10cm



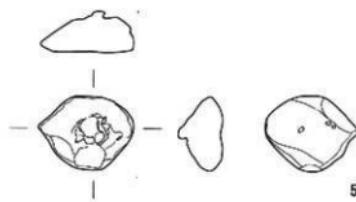
49



50



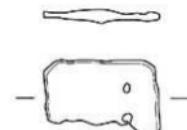
51



52



53



54



55



56



57



58



59

0 5cm

図 15 調査区出土遺物、旧石器、金属製品

第4章 考 察

第1節 武田城下町遺跡大手一丁目4310地点の遺構変遷

本年度調査地点では、平成20年度に職員寮建設に伴い実施した大手一丁目4313地点(以下、平成20年度調査区)から連続する城下町の遺構群が検出された。全体的に遺構密度は薄かったものの、遺構の重複などから数時期の変遷を捉えることができたため、調査区における遺構の変遷から確認する(図16)。

第1期(1A・1B)

遺構の重複関係や堆積土の様相などから判断し、最も古期に位置づけられるのは、3~8号溝跡である。南北方向に軸線を有する溝跡は3・6・7・8号溝跡であり、東西方向の軸線には4・5号溝跡が検出されている。そのうち、3・8号溝跡は4号溝跡と接続し、5号溝跡と6号溝跡も接続する関係にある。接続する溝跡は規模や形状、土層堆積状況も類似し、互いに重複関係が不明瞭であったために同時期とした。1号掘立柱建物も同時期の可能性がある。

南北軸の7号溝跡については、位置的には6号溝跡と併行関係にあり、類似した覆土が検出されたが、6号溝跡との同時性を裏付ける資料はない。しかし、重複関係から7号溝跡は5号溝跡より古い遺構であることから、5・6号溝跡の区画に先行する遺構と位置づけられる。

よって、短い時間幅の中で7号溝跡が先行して存在し、その後に1号掘立柱建物跡や5・8・9号土坑が設けられ、建物を囲むように5・6号溝跡が成立したとも考えられる。かわらけなどの形態をみるとかぎりにおいては、年代的には16世紀中葉前後の武田期に形成された溝跡群と位置づけられる。よって、7号溝跡の時期を1A、5・6号溝跡の時期を1Bとしておく。

第2期

次に第1期の遺構群との重複関係から2・9号溝跡の段階が想定される。二つの溝跡は直接の接点はないものの、堆積土中に炭化物や焼土塊、焼けた礫などを多量に含むという特徴があり、廃絶状況から判断するかぎり同時性が高いと考えられる。

この段階には少なくとも2号溝跡と併行する4号溝跡を埋め立てて整地しており、2号溝跡を境界とする新たな屋敷地が形成されたと考えられる。整地層中には熔けた金属が付着した土器なども含まれており、2号溝跡の堆積状況や出土遺物なども考慮すると、鍛冶職人が同地域に居住していたと考えられるのではないだろうか。

しかし、2号溝跡は焼土塊などが投棄される以前に一度掘り直しを行っている可能性が高く、初期段階の2号溝跡は、4号溝跡と併行して存在した可能性もあるため注意が必要であるが、重複関係がない1・2・6・7号土坑などが同時期の可能性がある。

第3期

9号溝跡を破壊するように1号溝跡が形成されることから、本調査地点の溝跡では1号溝跡が最も新しい遺構であり、調査段階では確認された4号溝跡と同一遺構と認識していたが、後に他遺構との重複関係や覆土と検出状況が異なるために別遺構とした。溝跡の流末が不確定ではあるものの、今回は搅乱扱いとした南北方向に入る水路跡か2号暗渠の位置に対応する溝跡が中世段階から存在していた可能性を指摘するに止めておく。

第4期

畑の畝や1~3号暗渠が形成される時期と考えられ、一帯が農地化したと考えられる。他の遺構としては、3・4・6号土坑は重複関係からも新しい時期に位置づけられ、暗渠出土遺物、また3号土坑出土遺物などから、17世紀後半までには開発されたものと考えられる。

第2節 武田城下町遺跡大手一丁目 4310 地点の出土遺物の様相

出土遺物は、平成 20 年度調査区同様に少量であり、調査面積 210 m²に対して近世陶磁器なども含めた出土遺物総点数は 492 点であり、うち中世遺物は 479 点出土している。そのうち、かわらけは 1 cm 以下の小片を除き 384 点を数えており、出土遺物全体の約 8 割を占める。

主体は、16 世紀中葉に位置づけられる厚手褐色系のかわらけがあり、形態的には 33・35 などにみられる体部に大きな稜線が形成されるものが多くを占める。16 世紀後半に位置づけられる薄手黄褐色系のかわらけは、出土数量が極めて少ない。かわらけの中には熔融した金属が付着したかわらけが 16 点ほど出土しており、鍛冶に使用され、廃棄されたものと考えられる。

土器類では擂鉢 29 点、火鉢 24 点があり、その他には信濃型の内耳鍋 2 点と脚付香炉が 1 点出土しているのみである。鉢類に比べて煮炊きの道具とされる鍋類が少ないと考えられる。鉄製品が補完していた可能性もある。

陶磁器については、国産陶器の総点数が 18 点出土しており、内訳は瀬戸美濃灰釉皿が 13 点と天目茶碗 1 点、擂鉢 2 点、常滑甕 2 点である。中国磁器の総点数は 8 点であり、内訳は青花皿が 4 点、青磁皿 3 点、青磁瓶 1 点となっている。平成 20 年度調査区に比べ、瀬戸美濃擂鉢や常滑甕が入るなど周辺の城下町遺跡に近い器種組成が確認されたが、全体の数量は少ない。年代的にも大窯 1・2 段階が主体であり、16 世紀後半～末に位置づけられる 3・4 段階の遺物は確認されなかった。

中国磁器に関しては、碗類がなく、時期はすべて皿類であった。中でも青磁皿はすべて輪花皿であり、平成 20 年度との共通性がみられる。45 は青磁花瓶とみられ、山梨大学職員寮建設に伴う一連の調査の中では唯一の大型製品である。

その他の遺物では、旧石器、古代、近世の遺物が出土しているが、旧石器については、別稿で述べるが、48 の須恵器のほか甲斐型土器が 1 点出土している。近世は、調査区内や暗渠からの出土遺物は、多くが 17 世紀後半から 18 世紀前半の遺物が多く確認されたことから、

遺物全体の年代から遺跡の様相を総括すると、16 世紀前半から中葉までは城下町の区画が成立し、16 世紀中葉には城下町が最盛期を迎えたと考えられる。その後は、16 世紀後半の遺物は極めて少ないと考えられる。徐々に土地利用が衰退し、武田氏滅亡後は城下町としての土地利用が途絶えたと考えられる。江戸期に入ると、初期の様相は不明であるものの、17 世紀後半までには農地として耕作が開始されたと考えられ、徳川綱豊による甲府藩時代から柳沢氏二代の治世においてこの一帯の開発が活発化したと推測される。

第3節 山梨大学職員寮建設に伴う発掘調査成果

本年度調査区と平成 20 年度調査区の調査成果のまとめとして、この地点の様相について検討する。まず、城下町を考える上で重要なのは、屋敷地を結ぶ道路の存在である。中世の甲府は南北 5 本の基幹道路と、それらを結ぶ東西道路で構成され、そこから奥の屋敷地には個々に道路が引き込まれていたと考えられる。本地点は、南北基幹道路の中間地点に位置し、現在は県道武田通り側から引き込まれた東西道路を利用しているが、戦国期はどのような形態であったのだろうか。

本地点は、一つの大きな敷地内が西と東で 4310 番地と 4314 番地として登載されており、それぞれ本年度調査区と平成 20 年度調査区として調査を実施した。古い地籍図上では大手一丁目 4314 番地として登載が確認でき(図 17)、敷地内には現在は存在しない細い道が描かれている。道は本調査区南側に位置する東西道路に接続しており、地籍図の示す位置は、その名残が敷地南側に生じているクランク部分(図 18)と推測される。

発掘調査では、その延長付近で平成 20 年度調査区 8・10・12 号溝跡が検出されている。中でも南北に併行する 10・12 号溝跡は、形状も安定しており、比較的深度も深く、下層に粗粒砂の堆積層が形成されていたことから、水が集まる基幹水路であったと考えられる。屋敷地の境界であることは溝跡の規模とその周辺の遺構の状況から想像できたが、改めて両調査区全体を巨視的にみると、道路側溝としての機能も十分想定できる。その視点からみると、溝跡の間は約 2.7m と 1 間半ほどの間隔があり、城下町内の道路として利用されていた可能性も考えられ、現在の東西道路のほかに中世段階から南側へ通じる通路が開かれていたと考えられる。

両調査区からはほかにも東西南北方向にいくつもの溝跡が検出されているが、平成 20 年度調査区の様相からも、溝跡の多くは屋敷地の境界として開削されたものが多いと考えられ、本年度調査区もちようど城下町の屋敷境に位置していたのではないかと考えられる。両調査区を比較しても、近似した軸線上に同じような規模の溝跡が検出されており、東西方向に延びる平成 20 年度調査区 2 号溝跡と本年度調査区古期 2 号溝跡、あるいは 4 号溝跡による区画も敷地内を南北に分割する区画として連続するものと考えられ、この一帯の城下町建設に伴い早い段階から機能した可能性がある。

また、焼土塊を上層部に多量に含む 2・9 号溝跡は、平成 20 年度調査区で検出された 10・11 号溝跡と同時期に存在した遺構と考えられる。溝跡に堆積していた焼土塊の評価については、火災による建物の壁体などの可能性と、炉や竈などの解体に伴い廃棄された可能性の二つを想定した。両調査区の様相を再検討すると、遺構面の検出状況から判断するかぎりにおいては、調査区内において火事が発生した様子は認められず、周辺部における火災を想定しても、限定された溝跡への火災処理には疑問が残る。

むしろ、焼土塊の詳細な観察結果からみて、炉や竈など粘土を用いた構造物の解体に伴い廃棄されたものと考える方がより現実的ではないだろうか。特に散発ではあるが、調査区全体から出土した熔融物付着土器や 2 号溝跡から出土した銅塊の存在からも、焼土塊は鍛冶に関連した炉などの壁材であったものが廃棄されたと結論づけられるのではないだろうか。

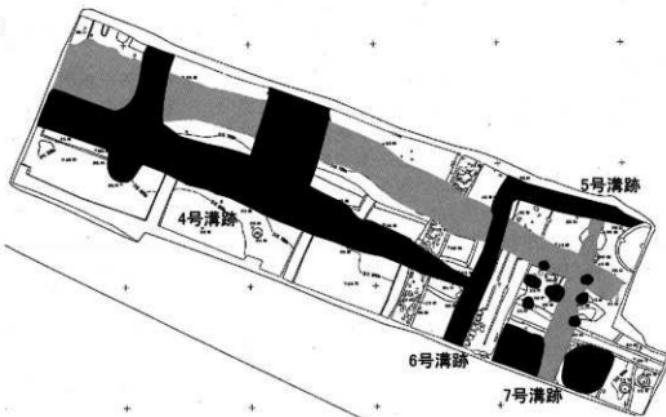
その場合、未調査ではあるものの、溝跡で区画された北西側または南西側の区画（図 18）に鍛冶職人の屋敷が営まれていた可能性が高いとみられ、今後同地内で開発が生じる場合には十分注意が必要であろう。

中世段階の甲府には堀によって区画された武士または寺社などの屋敷地が存在する一方、2 年度にわたり実施された発掘調査によって小規模な溝跡、あるいは平成 20 年度調査で発見された段切りによる屋敷地が存在することを明確にすことができた。さらに、本調査区の成立過程と居住者像に迫ることができたことは、この周辺地域の歴史と性格を考える上で重要な成果であり、今後より多くの調査事例の蓄積によって本調査区が再評価され、戦国大名武田氏の城下町「甲府」の様相の解明につなげることができれば幸いである。

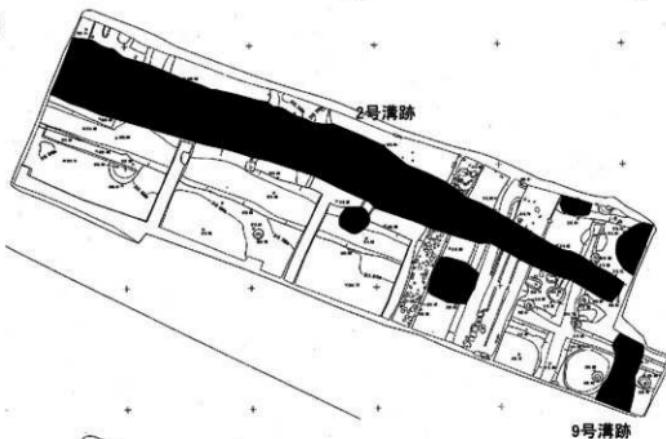
参考文献

- 飯沼賢司 1985 「戦国期の都市“甲府”」『甲府市史研究』第 2 号 甲府市市史編纂委員会
数野雅彦 1990 「中世城下町甲府の立地と都市プラン」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 3 号 帝京大学山梨文化財研究所
数野雅彦 2002 「本拠を築く」『定本武田信玄・21 世紀の戦国大名論 -』高志書院
甲府市教育委員会 2000 『史跡武田氏館跡 VI』
甲府市教育委員会 2001 『武田城下町遺跡 I』
甲府市教育委員会 2009 『武田城下町遺跡 II』
佐々木満 2002 「城下町甲府の諸相」『武田氏研究』第 25 号 武田氏研究会

第1期



第2期



第3期

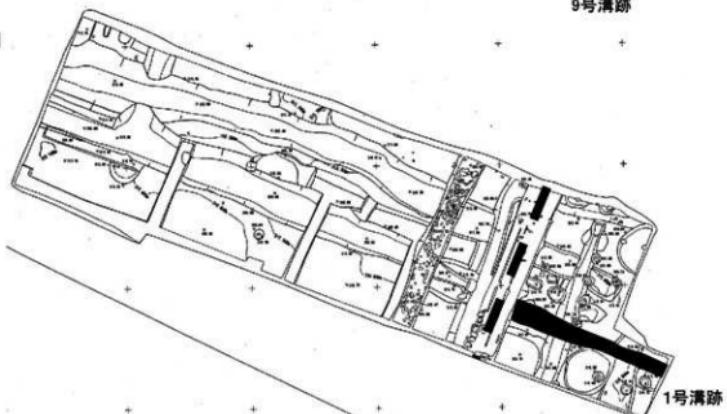


図16 中世段階の遺構の変遷 (1:200)



図17 調査区周辺の道と敷地の変遷

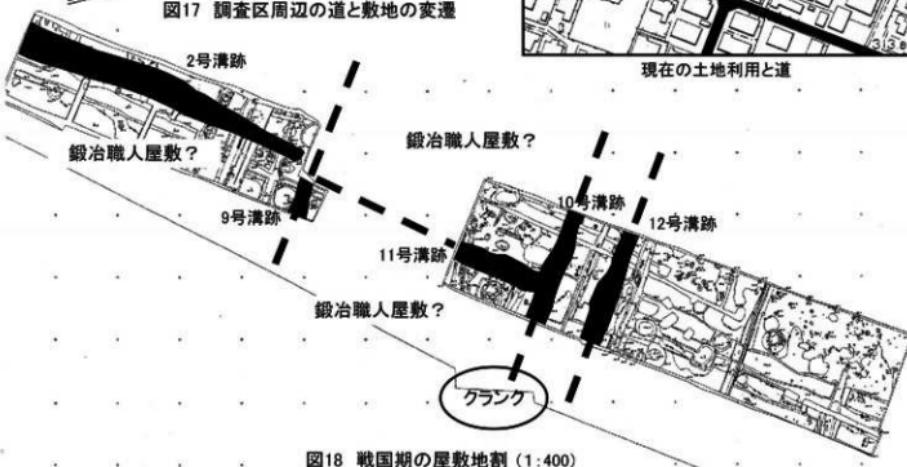


図18 戦国期の屋敷地割 (1:400)

第5章 結語

戦国大名武田氏のお膝元として栄えた甲斐府中推定城が遺跡となっている武田城下町遺跡内には、武田期に整備されたとみられる南北街路が武田氏館周辺から南へ5本延びている。遺跡密度も南北街路に沿って比較的濃く分布する傾向にあり、特に5本の街路のうちの中央に位置する現在の県道武田通りとその東西に併行する2本の街路に面する一帯に集中する。

今回の調査地点は、県道武田通りとその東側に位置する市道鍛冶小路に挟まれており、表通りからは最も奥まった場所に位置している。街路に面する表通りは一般的に考えても利便がよく、一定の土地利用が想定されるが、街路から奥地の土地利用については、利用頻度が低く、ともすれば耕作地あるいは空閑地と考えられても不思議ではない。

ところが、実際に調査してみると、遺構や遺物の密度は確かにそれほど濃いものではなかったものの、2ヵ年に及ぶ発掘調査区のほぼ全域から複数の屋敷地に係る遺構・遺物が検出されたことは驚きであった。東西方向に長い敷地内を横断するように調査できたことは、旧地形や遺跡の広がりを知る上では効果的な調査区設定であったことも幸いし、第4章でも考察したように、本地点から検出された溝跡などの遺構群は、戦国期の中で最低でも2度の変遷があることが明らかとなった。

年代的には、かわらけの様相をみるかぎり、16世紀後半の形態のものは少なく、16世紀中葉を主体とする。そのため、早ければ4号溝跡などによって区画された屋敷地が16世紀中葉には成立していたと考えられ、平成20年度調査区の様相も含めると、本地点一帯の開発は16世紀中葉に至振りの溝跡で区画された小規模な屋敷群が敷地全体に広がっていたことが判明したことは大きな成果であった。

また、居住者層についても、平成20年度調査区における10・11号溝跡や本年度調査区の2・9号溝跡に投棄されていた焼土塊や、熔融物付着時など出土遺物の様相から判断すると、鍛冶工人が本地点あるいは隣接地に居住していた可能性がある。本地点周辺の字名が「鍛冶小路」であることを加味すると、その可能性は高いと考える。

出土遺物に関しては、遺跡の保存状態に比して戦国期の遺物は全体的に少量であり、本年度調査区では青磁花瓶片1点出土しているものの、全体としては平成20年度調査区同様高価な陶磁器ではなく、廉価なかわらけなど土器類への依存度が高い傾向にあることが明らかとなつた。このような組成から改めて考えても、上級武士の屋敷地というよりは町屋に近い様相ではないかと考えられる。

また、本地点で特質すべきは、戦国期の溝跡への流れ込みであったが、旧石器時代のナイフ形石器が出土したことである。甲府盆地内の出土事例自体が少なく、相川扇状地上での出土は、本地点南側に位置する八幡神社遺跡で発見されているのみであり、特に水晶製の石器は希少である。旧石器時代の遺物の出土は、これまで予測し得なかつた発見であり、武田城下町遺跡内の周辺地点や相川扇状地上での今後の調査に十分な注意が必要となるとともに、新たな事例の増加に期待が持たれる。

国立大学法人山梨大学職員寮の建替えに伴い、平成20・21年度と2ヵ年にわたる発掘調査によって、県都甲府市の礎となった戦国期の城下町「甲府」の一角から様々な発見や成果が得られたことは、本市の成り立ちと展開を考える上で大きな収穫であった。同時に日本史の中で戦国期を代表する大名武田氏の城下町の様相の一端が解明されたことは、戦国期城下町研究に一石を投ずるものであり、これまでの発掘調査にご理解とご協力をいただいた山梨大学に改めて感謝申し上げたい。

武田城下町遺跡大手 1 - 4310 山梨大学紫雲館建設予定地内における発掘調査で、3点の旧石器時代石器を確認した。以下に、石器の記載を行う。

図 15-49 は、水晶製の二側縁加工ナイフ形石器である。長さ 2.4 cm、幅 1.1 cm、厚さ 0.3 cm、重さ 0.7 g と、かなり小型である。素材は石刀と思われ、打面側を先端に充てている。加工は正面右側縁先端側と基部左右縁部の 3カ所みられる。先端側と基部左側縁の加工は、刃潰し加工であるが、基部右側縁は比較的平坦な剥離である。基部左縁部の刃潰し加工は、基部端に回り込んでおり、基部端が若干丸みを持つ形態となっている。なお、先端には縱溝状剥離の使用痕が観察でき、投げ槍の先端としての使用が考えられる。素材の水晶は、透明で良質な石材である。転磨は受けおらず、旧石器時代に持ち込まれたと考えられる。

図 15-50 は、黒曜石製の二側縁加工ナイフ形石器である。素材は石刀と思われ、打面側を二次加工によって切り取り先端を作出している。二次加工は、3カ所みられる。正面左縁部では、先端側器体上半部に刃潰し加工を施している。打撃剝離の後に、加工縁部を硬質の石などに擦りつけ、直線的にトリミングしたもので、加工面側の加工縁部にステップエンドの微細剥離が連続する。加工面の器体中央側には背面からの加撃による対向剥離が施されている。正面左縁部器体下半部は非加工であるが、断面図にみると、かなり急角度な素材刃縁部が当てられている。基部側の加工は、正面右側縁と裏面右側縁と 2カ所に施されている。前者は、加工縁部がガジリで失われているが、残存する剥離面端部の状況をみると、刃潰し加工ほどに急角度ではなく、比較的平坦な打撃剝離によるものと思われる。後者については、主剥離面に沿った平坦な剥離で、小規模ながらいわゆる裏面加工と考えられる。石器は、この先端側上半と基部側下半の直線的な加工によって形成され、全体に菱形の形態に仕上げられている。なお、先端には縱溝状剥離、正面右縁先端側のナイフ形石器刃縁部には連続剥離の使用痕が観察でき、投げ槍の先端としての使用が考えられる。黒曜石は白色スジ雲状の細かな気泡がやや入るもの、透明で良質な石材である。おそらく信州産の和田崎周辺の産と思われる。剥離面に線状痕が多数観察できるが、剥離稜線は鋭利であり、転磨は受けおらず、旧石器時代に持ち込まれたと考えられる。長さ 3.6 cm、幅 1.1 cm、厚さ 0.5 cm、重さ 1.3 g である。

図 15-51 は、黒曜石製の剥片である。打面は背面方向からの 2枚の剥離面によって形成されるが、その左右に別の剥離作業面を形成していたと思われる剥離面が観察できる。背面の剥離は、主剥離方向とは 45 度程度の角度で傾斜した方向から打撃されたものが主体である。右縁部にはかなり急角度な剥離が 2枚みられ、本剥片の反対面を打面とする剥離作業面の存在を推定させる。こうした、剥離面の状況から、打面転位を繰り返す剥離手法の存在が推定される。こうした手法は、AT 下位の台形様石器の段階からみられ、武藏野台地 IV 下・V 層段階にもみられるものの、時期の特定は困難である。なお、剥片端部は折れています。稜線が若干摩耗しており、剥離面も多数の線状痕が錯綜してみられることから、縄文時代などに黒曜石原石とともに原産地で採取され、石器などの石器石材として持ち込まれた可能性も考慮する必要がある。長さ 2.2 cm、幅 1.9 cm、厚さ 0.7 cm、重さ 2.3 g である。

これらの石器の特徴からは、時期の特定は困難である。図 15-50 のような菱形のナイフ形石器は、県内では南巨摩郡南部町の天神堂遺跡で確認されており、砂川期（22,000 年前頃）に帰属する。図 15-49 のような小型のナイフ形石器は、相模野台地の月見野期や AT 下位の武藏野台地 VI 層段階にも見られる。しかし、両者いずれも基部側に平坦な二次加工が見られる点は、砂川期以降の可能性も考慮しうる。なお、水晶製ナイフ形石器はかなり希少なもので、県内では北杜市高根町の丘の公園第 1 遺跡で基部加工や一側縁加工のナイフ形石器が確認されているものの、二側縁加工ナイフ形石器ははじめての出土である。なお、北杜市長坂町の横構前久保遺跡でも透明度は落ちるもの、水晶製の台形様石器が 1 点出土している。

近隣で旧石器時代遺物を出土した遺跡は、500mほど南にある宮前町の八幡神社遺跡で、ナイフ形石器 3 点、剥片 1 点が出土している。いずれも石器の単独出土であり、剥片剥離や石器製作の痕跡が把握されるような本格的な居住遺跡とは違ったあり方である。甲府盆地内では、曾根丘陵や市之瀬台地などを中心に、20 カ所以上で旧石器時代遺物が確認されており、それを包含するローム層などの古い地層の存在が把握されているものの、本格的な居住遺跡がほとんどないという実情がある。一般的に関東から九州にかけての盆地には、旧石器時代遺跡はほとんど見られない状況がすでに指摘されており、本格居住には適さないなんらかの条件が盆地には存在している可能性があるものの、今後の周辺遺跡の調査に期待したい。

1.はじめに

武田城下町の鍛冶小路と呼ばれる一角からは、二次的に被熱した土器片の出土がこれまででも発掘から数多く検出されている。これは、その特徴から鍛冶等に用いられた土器の破片と考えられてきた。

今回の出土資料も、この鍛冶小路の一角からの資料であり、表面に二次的な被熱による発泡や、鉱滓と見られる付着物を有する土器片が存在する。

他にも同遺跡からは、金属塊と見られる小塊が1点出土している。

そこで、これら資料についてX線透過撮影、蛍光X線分析、X線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡による科学調査を実施したため、その結果について報告する。

2.分析資料

熔融物付着土器片	合計8点
金属塊	合計1点

3.分析方法・条件

・X線透過撮影

装置：デジタルX線リアルタイム透視装置（エクスロン・インターナショナル（株）製）

管電圧：160kV、管電流：4mA

・蛍光X線分析（XRF）

装置 SEA5230HTW（エスアイアイ・ナノテクノロジー（株）製）

（土器片）管電圧：50kV、管電流：32~88μA、測定環境：真空、測定時間：60sec、照射径：1.8mmφ

（金属塊）管電圧：50kV、管電流：1000μA、測定環境：真空、測定時間：300sec、照射径：0.1mmφ

・X線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡（SEM-EDX）

装置 SEM：QUANTA600（FEI（株）製）、EDX：GENESIS - CDU（アメテック（株）製）

加速電圧：30kV、測定環境：30Pa

4.結果及び考察

・熔融物付着土器

熔融物付着土器の写真（図1(a)）とX線透過撮影の画像（図1(b)）の比較から、重元素付着の影響による影が見られるものは、4点存在した。中でも、資料Cについて実体顕微鏡で詳細に観察を行ったところ、金属が熔融付着したと見られる球状物の付着が確認された（図2）。

また、XRFによる分析から、土器表面付着の熔融物は全ての資料で銅を検出し、他に鉛、スズ等を検出するため、この熔融物は銅や青銅に由来するものと考えられた（表1）。

しかし、前述の資料Cの付着球状物部分からはXRFにより金を検出し、他にも銅や銀、鉛等が検出している（図3）。そこで、この球状物付近をSEM-EDXを用いて各元素のマッピング分析を行い、分布状況を図4に示した。図4(a)は、球状物付近の二次電子画像であり、図(b)～(e)は各元素マッピングの画像である。金は球状物や近くの発泡部の底部に局在していることが確認し（図4(b)）、球状物部位は他に銀（図4(c)）や銅（図4(d)）、鉛（図4(e)）が分布していることが示された。

資料Cの使用方法には、金製品の熔解を行った後に青銅製品等を熔解した土器片の可能性が考えられるが、詳細は不明であり、今後の類例報告を期待したい。

・金属塊

金属塊は、写真（図5(a)）とX線透過撮影の画像（図5(b)）を比較すると、内部に空洞がかなり存在することがX線透過撮影の画像から確認され、この金属塊は流動性が良好でないことが考えられた。

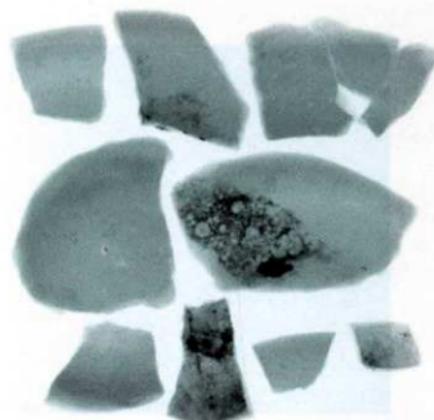
また、金属塊は表面全体が礫食層で覆われているため、微小部位を地金が露出するまでダイヤモンド砥粒により研磨を行い、露出した地金に対してXRFを用いてノンスタンダードによる定量分析を行った。分析は、同一地金露出部内3ヶ所で実施し、その平均を算出した（この際のXRFスペクトルを図6に示した）。

分析結果から、金属塊の成分はCu（銅）:98.7wt%、As（ヒ素）:0.7wt%、Ag（銀）:0.4wt%、Pb（鉛）:0.2wt%となり、この金属塊は純度の高い銅であることが確認された。そのスペクトルを図3(b)に示す。

ただし、この塊の用途は不明であり、今後の更なる検討が必要である。



(a) 外観写真



(b) X線透過画像

図 1 熔融物付着土器



図 2 顕微鏡写真

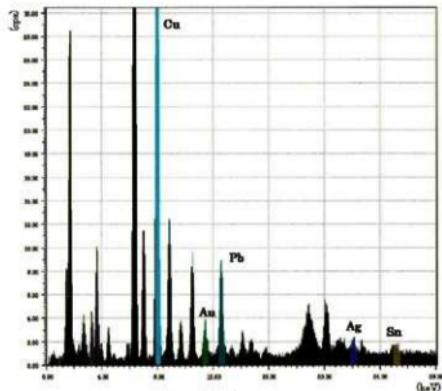


図 3 球状XRFスペクトル

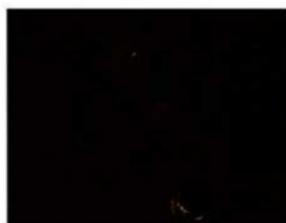
表 1 熔融物付着土器からの特徴的な検出元素

資料No.	位置	検出した特徴的な元素 ^{*1} ^{*2}
1	1[Cu (Pb)]	
	2[Cu As (Pb)]	
29	1[Cu As Sn Sb Pb]	
	2[Ga Sn Pb]	
37	1[Cu (Pb)]	
	2[Ga (Pb)]	
38	1[Cu (Pb)]	
	2[Cu (As)]	
39	1[Cu As Ag Pb]	
	2[Cu As (Sn) (Sb) Pb]	
40	1[Cu (Sn) Pb]	
	2[Cu As Sn (Pb)]	
A	1[Cu Sn (Sb) Pb]	
	2[Cu Sn (Sb) Pb]	
B	1[Cu Pb]	
	2[Cu Sn Pb]	
C	1[Cu Ag Sn Au Pb]	
	2[Cu Sn Pb]	

*1 Cu:銅、As:ヒ素、Ag:銀、Sn:スズ、Sb:アンチモン、Au:金、Pb:鉛
*2 ()は検出は可能だが、非常に低い。



(a) 二次電子画像



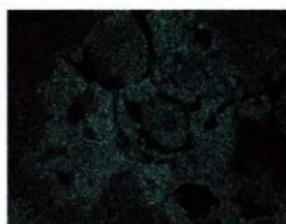
(b) Au



(c) Ag



(d) Cu



(e) Pb

図4 SEM- EDX 画像



(a) 外観写真



(b) X線透過画像

図5 金属塊

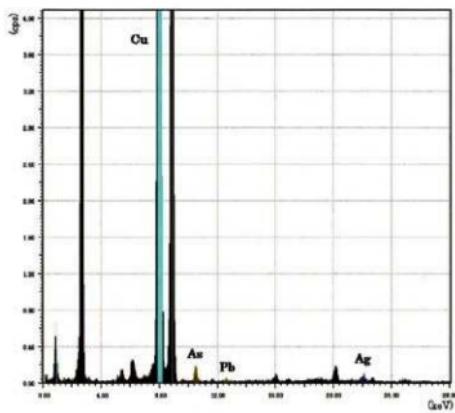
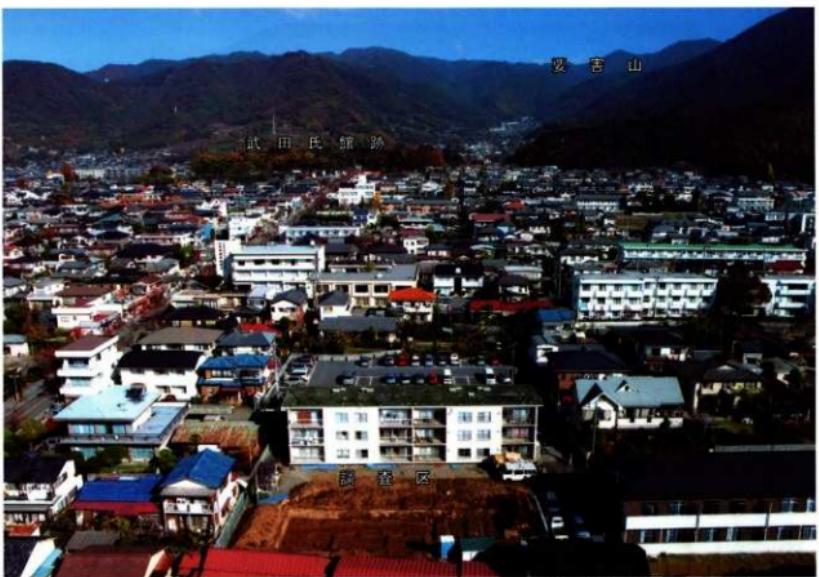


図6 金属塊 XRF スペクトル



平成 20・21 年度調査区全景（合成）



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



調査区全景（直上）



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



1・2号暗渠検出状況



1号暗渠検出直後



3号暗渠検出状況



1号溝跡完掘（西から）



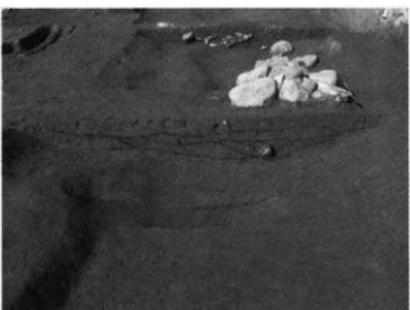
1号溝跡西侧断面



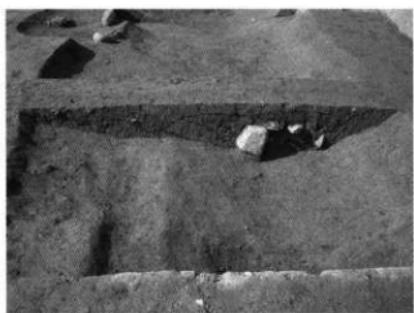
1号溝跡東壁断面



2号溝跡完掘（西から）



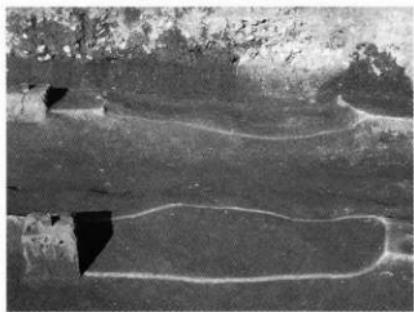
2号溝跡東側断面（東から）



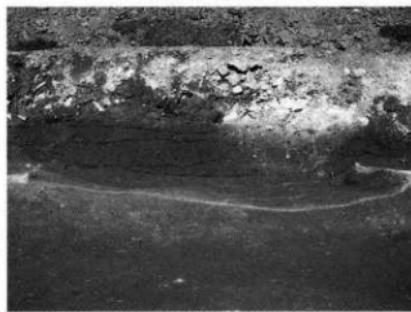
2号沟跡中央断面



2号沟跡西壁断面



3号沟跡断面



3号沟跡断面



4号沟跡完掘



4号沟跡断面



5号沟跡完掘



5号沟跡断面



6号溝跡完掘



6号溝跡断面



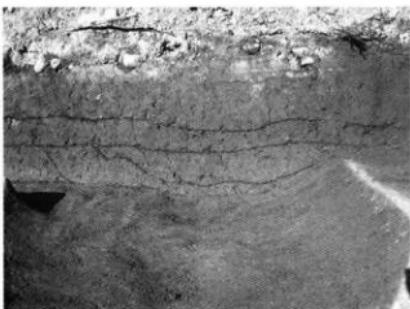
7号溝跡完掘



7号溝跡断面



8号溝跡完掘



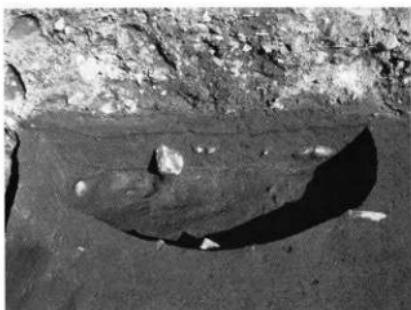
8号溝跡断面



9号溝跡完掘



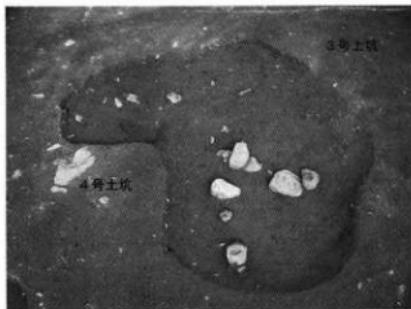
9号溝跡断面



1号土坑完掘



2号土坑完掘



3·4号土坑完掘



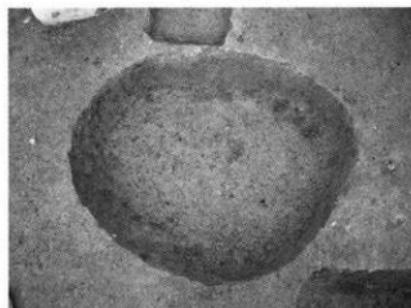
5号土坑完掘



6号土坑完掘



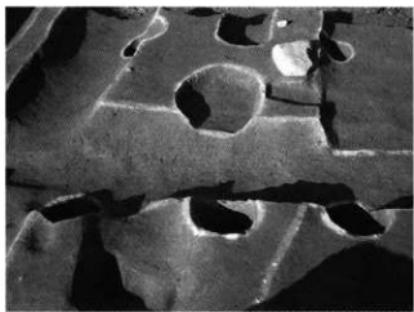
7号土坑完掘



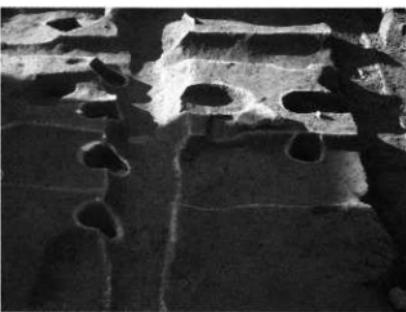
8号土坑完掘



9号土坑完掘



1号掘立柱建物跡（東から）



1号掘立柱建物跡（北から）



調査区南黄褐色土層帶



調査区南側歓跡



発掘調査前



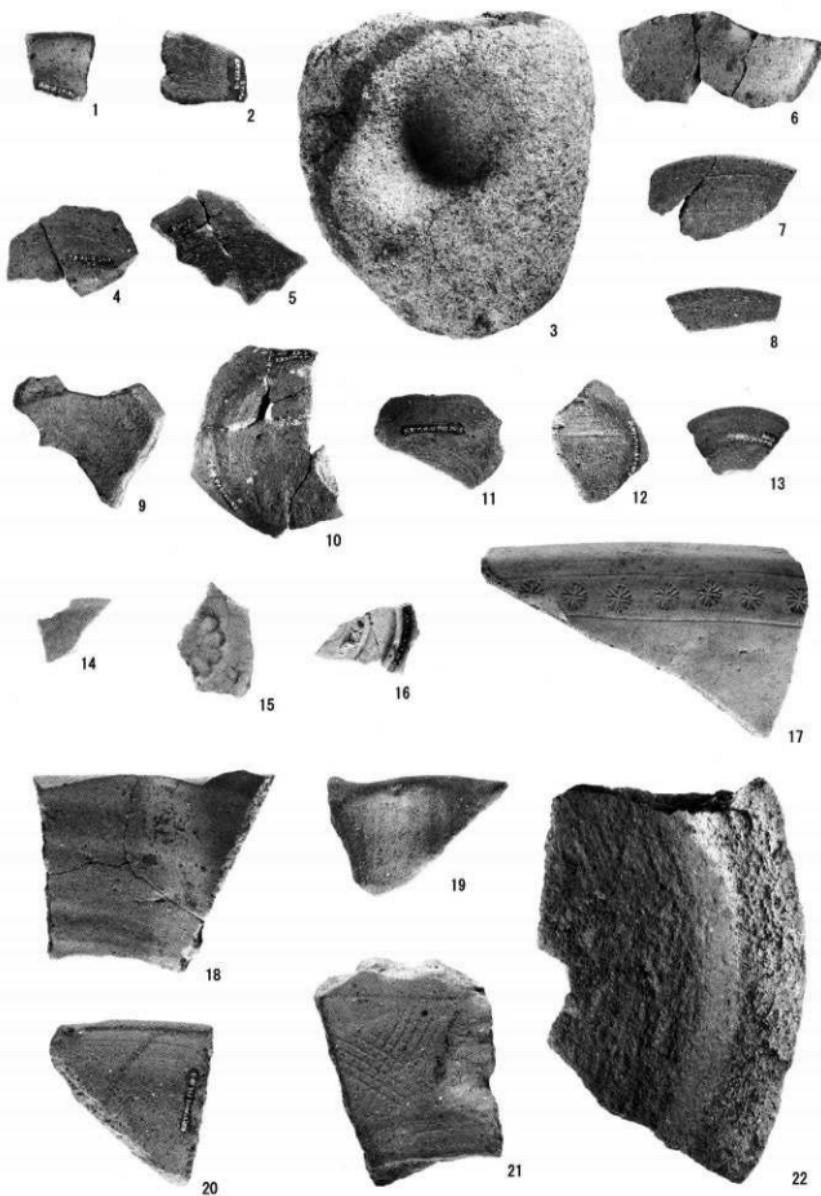
重機による掘削

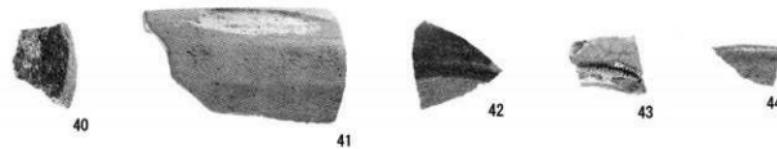
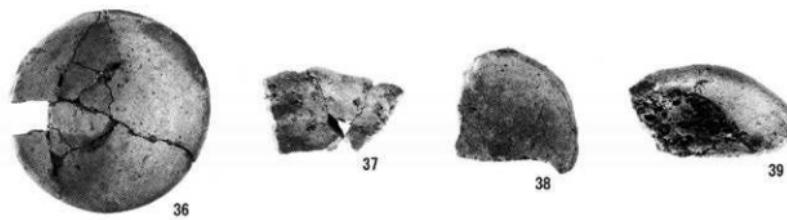
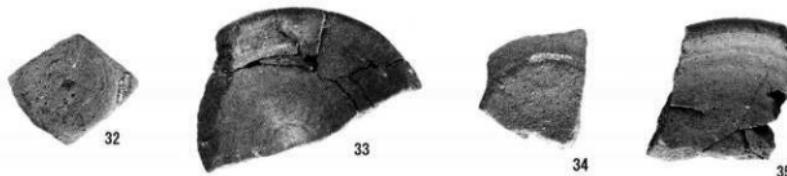
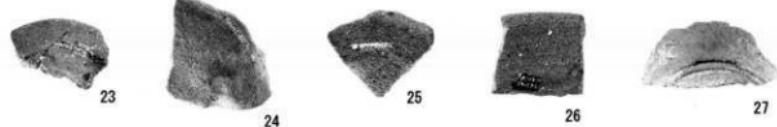


発掘作業風景



調査記録作業風景







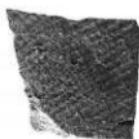
45



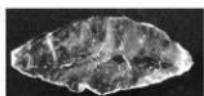
46



47



48



49



50



51



52 上



52 底



53



54



55



56



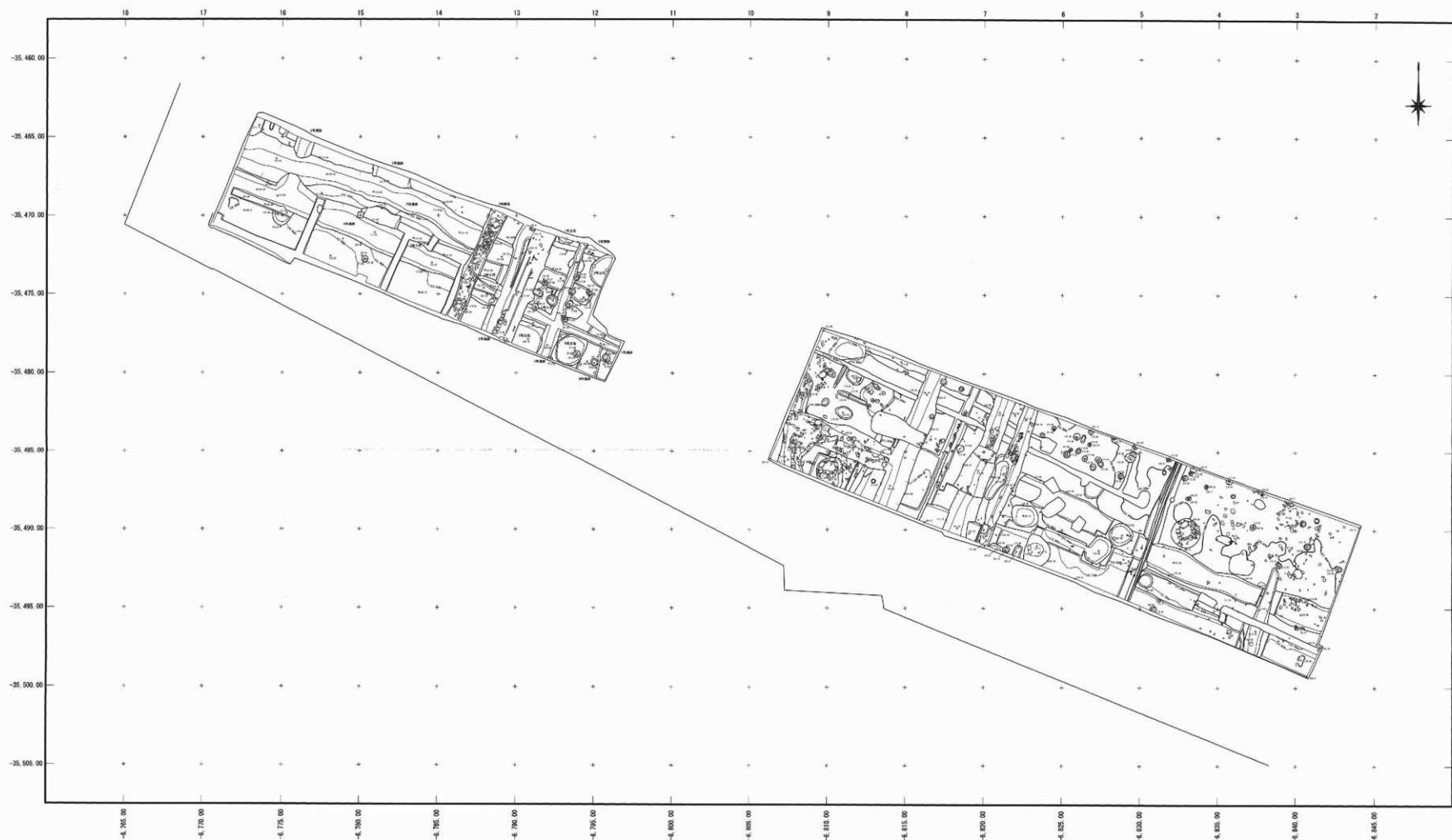
57



58



59



報告書抄録

ふりがな	たけだじょうかまちいせきVI						
書名	武田城下町遺跡VI						
副書名	国立大学法人山梨大学紫雲館建設工事に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	甲府市文化財調査報告書						
シリーズ番号	48						
編集機関	甲府市教育委員会						
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目 18番1号 電話 055(223)7324						
発行年月日	平成22年3月26日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
武田城下町 遺跡	山梨県甲府市 大手一丁目 4310	市町村	遺跡番号	35° 40' 49"	138° 34' 29"	20091001 ~ 20091121	紫雲館建設 工事に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
武田城下町 遺跡	城下町	中世	暗渠・溝跡・掘立柱建 物跡・土坑・柱穴	かわらけ・土器壺 鉢・火鉢・陶磁器・ 石製品・古鏡・釘 銅製品			

甲府市文化財調査報告 48

武田城下町遺跡VI

—国立大学法人山梨大学紫雲館建設工事に伴う発掘調査報告書—

平成22年3月26日

発行 国立大学法人山梨大学・甲府市教育委員会

〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目 18番1号

TEL 055(223)7324

FAX 055(235)5648

印刷 (株) 東洋レーベル株式会社

〒400-0032 山梨県甲府市中央五丁目 1-29

